
決め手はあんパン

ルシカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

決め手はあんパン

【Nコード】

N3944E

【作者名】

ルシカ

【あらすじ】

元気なのと勢いがいいことが取り得の女子高生、可牧^{かまき}はある日の中庭で想い人へと告白する。しかしお相手の都村^{つむら}君は食べることにしか興味がなく、でもそのわりにはなんだかんだで一緒にいることに——かみ合わない二人の恋愛模様をおもしろおかしく描く、突っ走りラブコメです！あと、わりとベタです！

第一話 食欲に走る男と突っ走る女（前書き）

ほんのちょこーつと下ネタあります、軽いものですが嫌いな人は
ご注意を。

第一話 食欲に走る男と突っ走る女

その日は、特別な日でもなんでもなかった。

見上げてみれば目に映る空は、何が気に食わないのか不機嫌な灰色。風は初夏だというのに少し冷たい。そんな陰鬱な空気を感じ取ってか、彼女が慣れ親しんでいる校舎も心なしか元気が無いように見える。

つまるところ、記念日にするには景気が悪い日でもあった。

——でも、それでも。

告白しようと、決めたんだ。

ずっと目で追っていた。それが恋だと気づくには時間がかかったけど……その分、気づいたら気持ちをすぐに伝えなきゃダメだと思った。この気持ちの熱さが消えないうちに。

『もしもし、可牧^{かまき}? 大丈夫なのアンタ』

「だだだ大丈夫でありますよ? わたくひはやる気が満々でありまふ!」

『空回りも満々ね』

「マンマン!」

『吠えるな』

そう、熱い。彼女——蛍衣可牧は、熱すぎるその気持ちを存分に持て余していて、まともに喋ることすらできなかった。短く揃えられた髪は黒、瞳も黒。熱を集めやすいその色は、おそらく可牧の心臓を加熱する理由——ではないだろう。当たり前だが。

高校一年生にしては小さいその身体、しかし声はでかい。今の可牧の格好は一応“隠れている”形になっているのだが、そんなものはお構いなしだ。周囲に人影がないのが幸いだが、気にしている余裕がないのだろう。なぜなら熱すぎて。ヘタをすれば小学生でも通用しそうな顔が、まるで誰かがこっそり茹でているかのように真っ赤である。誰だ喉あたりにガスコンロを入れた奴は。

余裕が無いといえど——いや余裕が無いからこそ、可牧も自分の顔とその他もろもろがどういった状態にあるのかは把握していた。だから熱を少しでも逃がすために告白直前に隠れ潜み、こうして親友と電話なんかしているのだ。

「やる……わたひはやります!」

『どう聞いてもやられそうな声よ?』

「やるもん、やるんだもん!」

『子供になるな。やる気だけじゃーどうにもならないこともあるでしょうに。とりあえず発声練習でもしてみたら?』

「わかった!」

ああ、やっぱり親友は頼りになるよ。うんうんよしよし落ち着こ

う。こういうときは咳払いしてから……可牧は心の中で呟いて、早速それを実行に移す。

「コホン……こほっ、こほっ、ゴホゴホッ！」

『むせるな』

「うううっさいなあ仕方ないでしょー。こほん！ あーあー、アメンボ赤いなあいうえお！ あれ、赤いアメンボって蚊のことじゃないの？ 血を吸ったやつ」

『知らないわよ』

いつものそっけない声を聞いているうちに可牧は少し落ち着いてきた。もう一度大きな深呼吸。

……よし。景色に抱いていた妙な被害妄想も静まってきた。空はちょこつと隙間を作って日の光を差し入れてくれて、風の温度も少し上がった。校舎もちよつと元気出た。多分。きつと。

他人から見れば気のせいとしか言いようが無いミリ単位の変化も、告白前の女の子にとっては心境を大きく左右するものだ。先ほどまで怯んでいた顔に気合を入れて、

「いざっ！」

見ないようにしていた方へ、身体を向けた。

可牧が一人で悶々としていたのは学校の中庭の端、比較的大きな花壇の影だった。中庭のベンチからは死角。見られていたら死ぬ。

『死角』という言葉はそういう意味ではないが、可牧にとってはどちらでもよかった。どのみち緊張で死にそうなのだから。

しかし不幸なことに緊張では死ねない。勝負場所へ向けた身体を今さら直すこともできず、可牧は足を踏み出した。

「いける。いきます。いくしかない」

『うむ、見事に前向きな三段活用ね。好きよ、そういうの』

「私もミサちゃんが大好きです！」

『あたしに告白してどーする。ほら、いけ』

「おうよ！」

ビシッと敬礼をしてから携帯を切り、パン！ と気合一発両頬を叩き――蛍衣可牧、人生初の告白へ挑戦である。

一步一步、おそろおそろ。踏み慣れた中庭を進んでいく。そう、慣れていたはずだ。それなのに、緊張がピークに達している今の可牧の目には中庭がまるで異世界に見えた。

「……ここ、どこお？ あこ？」

――ハッ！ 無意識にそんな言葉を口走ったことに気がつき、慌てて中庭の中心に目を向ける。かろうじて見えるベンチに座る背中はずっと揺れていない。よかった、聞こえなかったようだ。一世一代の告白の出だしがワケのワカラナイ言葉にならなくて、可牧は心底安堵した。それしても「あこ」ってどこだ。

……うう、でもワケがワカラナイのは変わらないよう。中庭がアマゾンに見えるよう。花壇がジャングルに見えるよう。私はきつと猿だろう……アマゾンに猿っていたっけ。

再び心が異世界に迷いこみながらも、勇敢な可牧の足はゆつくりと、しかし確実にベンチを目指していた。

そう、可牧の好きな人がいつも放課後に座っているベンチ。雨の日以外は必ずそこに座ってゆつくりと過ごすその人を、可牧はずっと見てきたのだ。

見てきただけ。

会話をしたことは一度もない。

でも、好き。

絶対。

「あの――」

意を決して、可牧は声をかけた。

可牧の声は元々大きい。それが気合を入れると、どういうことになるか。

「すみませんっ!!」

「うおお!?!」

ものすんごく大きな声になって相手はビックリ仰天するのである。

「ああん!? な、なんだよ!」

「私、あなたのことが好きです!!」

言った。ついに言った。

可牧の頭の中は真っ白だった。どんな風に告白しようか最初はやっぱり出会いとかきっかけとか好きだと思った理由とかそんなのを語ってみればいかがなものか——告白前にはあったはずのその思考は、ものの見事に消し飛んでいる。

「う……あ……」

告白した相手——坂頼都村さからい つむらは困惑しているようだった。いや、愕然という言葉のほうが正しいかもしれない。それも仕方のないことだろう。さして接点のない女の子にいきなりこんなことを言われては。

「私と、付き合ってください!」

勢いに任せて言い切った。

この上もなくわかりやすい告白。

その、結果は——

「うるせえ!!」

はつきりとした、拒絶だった。

あまりといえばあまりの返事に絶句する可牧。

しかし。

「あんパン……俺のあんパンが……」

「……………ほえ？」

厳しい表情で彼が見つめているのはただ一点。

可牧の一声に驚いて落としてしまった、食べかけのあんパンだけだった。

「あ、あのう、もしもーし？ 私の話は聞いていただいておりましたでしょうか、はてな？」

「あん？ 付き合えだあ？ どこにだ！？ 何か奢ってくれんのかコラ！ それはあんパンよりうめえのかオラ！ 俺のあんパンどうしてくれんだああん！？」

「えええ！？ そそそその、私としては奢れと言われれば喜んで奢りますがその」

「よし奢れコラ！ すぐ奢れオラ！ 美味しいもんじゃなきゃ許さんぞああん！？ おっとその前にあんパンに謝れ！！」

「ごめんなさいもうしませんでしたんんん！！」

「――で、どうしたって？」

「えへへ、その後ね、二人で牛丼を食べにいったの。ぎゅうどん。こう牛がぶしゃつとかかったお米を格好よくズババツと食べまくるの。そして都村君は言うんだ。おかわり！！ 特盛り！！ つゆだくだく、って！ ああああ格好よかったあ……思わず私もだくだくだく」

一世一代の記念日の翌朝。何気に満足した可牧は幸せ笑顔を振りまきながらスキップで登校した。そして親友に捕まり、事情聴取が始まって、それからずっとこの調子なのだが……

「告白は」

「あ」

親友の鋭いツツコミ。頬をドロドロぽと溶かしながら幸せそうに語っていた可牧は、ようやく重大な忘れ物に気がついた。告白の返事が結局うやむやのままだったのだ。

「あんたねえ……いったい何しに行ったわけ？ あんパンを崇めるために死にそうなほど覚悟してたの？ だったら笑えるけど」

「そんな！ 笑っちゃダメだよミサちゃん！ あんパンってすごいんだよ。とある人気アニメじゃ最強なんだよ。パンチで全部ぶっ飛んじゃうんだよ？」

「確かに。あんたの頭がぶっ飛びすぎだわ」

さっきから呆れながらも根気強く話を聞いているのは可牧の親友、通称ミサだ。通称、つまり本名は別にあるのだが、彼女はその名で呼ばれることをひどく嫌う。それを知っている人間は教師であろうと彼女を本名で呼ぶことはない。殴られるから。

そんなミサの特徴を他に列挙すると――特徴その一。とんでもなく美人。そのクールな美貌は可牧が通う高校で間違いなく一番だろう。校則に引かかるはずの長い髪は、“美しすぎて切れとは言えない”という理由で見逃されているというもっぱらの噂だ。事実、全くクセのない彼女の髪は美しかった。

「あのね可牧。あんたわかってるの？ おかわりしてる場合でも盛りされてる場合でもだくだくしてる場合でもないのよ？」

特徴その二。口が悪い。

「だくだくにするのはアソコだけでいいのよ」

特徴その三。とても下品。

「ミミミミサちゃん！ そんなこと言っちゃダメ！」

「こんな美人つかまえてそんなウサギみたいな呼び方やめてよ。さもないとだくだくにするわよ？」

「やめてえええええ！」

そして最後の特徴――可牧の親友。すでに名物コンビとしてクラ

ス外にまで知れ渡っている。今も周りのクラスメイトは「あーやってるやってる」「一日の始めはこれ見ないと調子でないんだよ」「俺も俺も。これで笑わないとトイレのでっかいのが出ないんだよ」「おまえ夏休みどうすんだ。破裂するぞ」などと好き勝手に言いながら二人を見学していた。

「とにかく。もう一度ハッキリ告白してきなさい。あんな身体がでかくて目つき悪いって印象しかない男のどこがいいのか知らないけど」

「ううう、でもお、昨日みたいな恥ずかしいことをもう一回言うなんてえ……なんだか印象悪いっぽいし」

「悪かったら改善すればいいだけでしょ。女の武器でも使いなさいな」

「そりゃミサちゃんは全身武器だし言葉だけでも兵器だからいいけどさー、私ってそういう武器って無いっぽくない？」

見物人のクラスメイトが無遠慮に可牧の身体を眺め回した。ちっこくて可愛い、というのが大半の意見だが、その活発な性格と未発達な体型からは残念ながら“女らしい”というよりは“少年っぽい”という感想を抱かざるを得ない。

しかしミサはそれを鼻で笑った。

「はっ。男の股間にアレがついてりゃ女の武器なんてどれでも効くわよ」

「ミサちゃん抑えて！　ここは教室！　公共の場であります……！」

！」

両腕をぶんぶん振り回す可牧を見るミサの目は、『あんたがおもしろい反応返してくれるからわざとやってるのよ♪』と雄弁に語っていた。

——と、そのとき。

「おーい、蛍衣さん。都村のやつ登校してきたみたいだぞ」

隣のクラスに様子を見に行っていたおせっかいなクラスメイトがそんなことを伝えてきた。

その瞬間、可牧の脳みそは大沸騰。

「なななななななな」

「はいはい落ち着きなさい。別に目の前にひょいと現れたわけじゃないんだから」

「そ、そうだよね！ し、深呼吸深呼吸——」

「ついでに連れてきてみた」

「あいうえおいうえあ!？」

とことんおせっかいなクラスメイトである。可牧がビクビクしながらそちらを見れば——昨日と同じ、ムスっとした坂頼都村の姿が！

「あらま。目の前にひょいと現れちゃったわね。まー仕方ない。

当たって砕けな、可牧」

「ひ、ひゃい!!」

いまいち頼りない返事をしながらも覚悟だけはできたのか、可牧は都村に向かって突進していく。

「おい、何の用なんだよ!」

「まあまあ、いいからいいから」

「俺は忙し——」

無理やり連れてこられて不満をぶつけている都村とクラスメイトに、

「あのすいません私あなたのことが好きですよかったですら付き合ってくださいませんか!?」

可牧はありったけの勇気を振り絞り、自分の想いを一息でまくし立てた。

二回目の成果か。わかりやすかった告白はさらに明瞭になっていた。

そして、その結果は——

ぽと。

「……ぽと?」

ほわっつ？ と可牧が足元に目を向ける。

そこには、食べかけのあんパンが。

「……人が、あんパン食うのに忙しい中、仕方なく来てみれば」

勇気と一緒に声量も振り絞ってしまったらしい。そしてまたもや昨日のように驚かせてしまったと――

「……と、空気が重たくなっていくっぽい音が聞こえる。」

可牧は顔を上げられない。恐怖で汗がだくだく、特盛りも余裕でいけそうなくらいだ。

「……てめえ」

ドスの効きまくった声。

「……またてめえか」

顔も見ずにそんな声を聞いているほうが恐ろしくなり、ついに可牧は顔をあげた。

大きな胸が見える。あ、都村君って身長高いんだっ―なんて思い出しながら、もう少し視線を上げた。

鬼がいた。

般若がいた。

悪魔でもいい。

とにかくそんな感じの怖いのがいた。

「てめえはあんパンに恨みでもあんのか!? あれか、昔に親があんパンに殺されたとかそんな過去でも持ってやがんのかああん!?」

「そそそそんなおもしろい過去はもってません!」

「おもしろくねーよ! あんパンが人を殺すことのどこがおもしろいんだてめえ!」

一般的には充分おもしろい部類である。

「ほほほほほ」

「笑うな!!」

「違います滅相もない! ほほほほんと申し訳ありません謝ります! ただ私はお付き合いしてほしいと問うた結果の返事がほしかっただけでありまして!!」

泣きながら妙な日本語で平謝りする可牧の言葉を聞いて、都村の怒りオーラが止まった。

「付き合い——ああ、そのことか」

「は、はひ……」

「いいぞ」

「はへ？」

可牧はもちろん、それを聞いた誰もが耳を疑った。

「何ハトが豆鉄砲を食らったみたいな顔してんだ……うらやましい。豆鉄砲ってうめえのか。どうなんだオイ」

「ほ、ほんとにお付き合いしてくれるんですか!？」

「あん？ ああいいぞ。それはともかく豆鉄砲の味を——」

都村が言い終わる前に、大歓声が教室を包み込んだ。

驚愕！ クラスのアイドル漫才師の片割れに彼氏が!!

このビッグニュースに大興奮したギャラリーは怒濤の勢いで可牧を胴上げしようと集まり——

「ま、いっか。んじゃとりあえず次の休み時間付き合えよ」

「は、はい!」

「購買であんパン奢れ。昨日落としたのと今日落としたの、ついでに迷惑料として三つな」

「は……はい？」

沸いていた野次馬はピタリと動きを止めた。

「んだよ。返事しねーとクリームパンも追加すつぞ」

「あ、はい喜んで！　べ、別にクリームパンもいいよ！　ああこれが亭主関白とゆーやつなの！？」

そして全員が思った。

子分だ……舎弟だ……彼氏彼女なんて甘いもんじゃねえ……どつからどう見ても便利なパシリを手に入れたヤな奴にしか見えねえ……

「ふうん……おもしろい男じゃない」

戦慄に震える教室の中、ただ一人ミサだけが愉快そうに口元を歪ませていた。

——かくして。食欲魔人と突っ走り女のカップルがここに誕生した。

はつきり言おう。

前途は多難である。

第一話 食欲に走る男と突っ走る女（後書き）

第二話 親友思いなミサとフリーダム遠衣

——可牧と都村が付き合うことになってから、丸一日が経過した。

二人が通う高校は朝練が盛んであり、早くから登校する生徒が多い。それに釣られてか、部活動に属していない生徒も基本的に朝が早い。H Rの三十分前にはすでにかんりの登校率になるのだ。

そんなわけで、教室にはすでに半分以上の生徒が席についていた。談笑する生徒、今日の宿題を急いでやっている生徒、勉強している生徒……は、少しだけ。そんなどこの高校にもある穏やかな光景の中で一人だけ、不機嫌なオーラを立ち昇らせている生徒がいた。

「おもしろく、ないわ」

昨日、「おもしろくなりそうね」などとほくそ笑んでいたはずのミサである。教室には可牧の姿はまだなく、今日は一人で席に座り頬杖をついているのだが……

「おもしろくない」

もう一度独りごちる彼女の声に、今度は応える声があった。

「あれま、どうしたのよ。綺麗な顔がナマハゲみたいになってるよ？　なんかこう、悪いごはあたしだあ食べちゃうぞおおお、みたいな」

イラついているからか、親しい間柄だからか。ミサは一度かかったその声を無視したが、

「なーなー、ミソリー」

「本名で呼ぶなああああ！！」

神速の平手打ちが炸裂。“通称”を使わなかった男子生徒が弾かれたように回転し、机をなぎ倒しながらダウンした。ボーリング的にはストライクな感じである。

「ううう、ナマハゲがぶったー」

「ナマハゲとも呼ぶなっ！ いい？ あたしはミサ！ 美素梨みそりでもミソリーでも三十路でも味噌漬けでもないの！！ 聞いてるの遠衣とおい、わかった！？」

「はあい」

踏まれながらもヘラヘラしながら答えるこの男、名前を武田遠衣という。金髪に鼻ピアス、制服は着崩しているなど、誰が見てもわかりやすい不良の格好をしていた。ただし高圧的な雰囲気は微塵もなく、どちらかというと親しみやすいタイプだ。グレていると言うよりは人より少し自由なだけ、というのがクラスメイトが抱く彼への印象である。

「それで？ 何がおもしろくないのさ」

踏まれるのにも飽きたのか、ひょっこり立ち上がる遠衣。美素梨——ミサの方は物足りなさそうな、というか踏み足りなさそうな顔をしていたが、ため息を一つ吐いて諦めた。

「そういえばあんた、昨日は学校にきてなかったわね」

「うん、天気悪かったから休んだ」

訂正。この男、かなりフリーダムである。

「じゃあ知らないか。あのね、可牧のことなんだけど」

「ああ、彼氏ができたってやつ？」

「……なんで知ってるのよ」

「風の噂で」

「家に居たくせに。どこから風が吹いてくるのよ」

「知らないの？　うち、隙間風が多いんだよ」

「あんたの家なんか行ったことないんだから知るわけないでしょう。はあ、なるほど。あんたの脳みそみたいにスカスカなわけね」

ミサの皮肉にも、遠衣はどこ吹く風で笑い——何かに気がついたようにポンと手を打ち、ミサを指差した。

「脳みそりー」

瞬間、ミサの身体が霞んだ。

神速の踏み込みを加えた掌底をもらった遠衣は冗談のように吹っ飛び、教室の壁に背中から激突。さらに追い打ちの肘打ち、裏拳へ

とコンボを繋げてさらにさらに危険っぽい打撃をズドドドドド！！

満足するまで人間太鼓を鳴らし終わると、ミサは右手で遠衣の額をわしづかみにした。そしてギリギリと力を込める。

「おおお……Oh, No! オウノウ! ていうかおう脳!!
脳っ! 僕の脳がああああ!!」

「言っとくけど、次はないわよ。三度目の正直って言うでしょ?
あたし、正直になってあなたを殺そうと思うの」

脳髓を絞めあげながら天使の笑顔でそんなセリフを言われた日には、誰であろうと頷くしかない。

しかし遠衣は違った。ちょっとだけ抵抗を試みる。

「で、でも仏の顔は三度までって言うよね!」

「あたしが仏に見える?」

「このナマハゲめ!! うああああ痛い痛い割れる割れるううう
! ごめんすいませんもうしません僕が悪かったですうううう」

ちょっとしただけの抵抗、あえなく終了。

こんな大騒ぎをしても、「あーまたやってる」と呆れながら見物する生徒たち。このクラスには名物が多いのである。

しばらくして……ミサの手が疲れたという理由で開放された遠衣は、すっかりとおとなしく従順になっていた。

「お手」

「わん」

これくらい従順である。

「ちんちん」

「わんっ！」

お約束の命令に、ノリでズボンを下ろす遠衣。

「ちっさ」

「聞き捨てならぬこと言ったなわん！」

鼻で笑うミサに遠衣犬は大激怒だ。

「今はともかく、その気になればジャンボジェットになるんだわん
！！」

「そう？ どう見ても子供用の注射器じゃない」

「戦闘形態じゃないからだわん！！」

「いいからそれ仕舞いなさいよ。みつともない。情けない。可哀想。
貧相。哀れ。みすばらしい。泣けてくるわ」

「わん！ 一応弁解しておくが今下ろしたのはズボンだけで、パン

ツは下げてないわん！ 全部ミサ嬢の妄想だわん！」

「だから仕舞いなさいよ、その犬パンツ」

「わん」

今度は素直にズボンを上げる遠衣。もうミサに逆らったりはしないのだ。

しかしこの男、恐るべきことに、一日経つと再び今日のようなことを繰り返す。一日二回までならミサを本名で呼んでもいいと思っているらしい。その度に死にそうになっているのになぜか懲りないのだ。

そんな彼の真意はわからない。

なぜなら誰も興味がないからだ。

「さて。朝の準備運動も終わったし、とにかく話を聞きなさいよ」

「わん」

準備運動という言葉に嘘はないらしく、ミサは心なしか清々しそうな顔で遠衣に向き直った。高校に入ってから短い付き合いだが、この二人はなんだかんだで仲がいいのである。

「さっきあんたが言ったとおりよ。可牧の告白がなぜか成功して、彼氏ができちゃったの」

「まるで成功するなんて予想していなかったみたいない方だわん」

「そりゃそうでしょ。だってあの子バカなもの」

「直球だわん。剛速球だわん。誰も打てないわん」

おどけて犬のフリを続ける遠衣。しかしミサは気にしない。

「それが成功しちゃってさ、まあこれはこれでおもしろいかなーと思っただけけど、予想と違ってさ……」

「予想はどんなだったのさ」

ツッコミがこなくて寂しそうに犬のフリをやめる遠衣。しかしミサはそれも無視。

「もっとこう……線路から外れて爆走する機関車みたいな可牧を想像してたのに」

遠衣の脳裏に『今日から私が彼女さんなのさ！ でも彼女ってなんなのさ！？』とか叫びながら空を飛び回る可牧型機関車が浮かんだ。楽しそうである。

「見てえ」

「なに？」

「いあいあ、こっちの話。で、違ったと？」

「ええ！ 全っ然！ 昨日さ。あの子と都村君、放課後もずっと一緒にいたらしいの。それでね――」

昨夜、ミサは夕食とお風呂を終えた後に可牧へと電話してみた。
どうやら向こうも今日のことを報告しようと思っていたらしく、第
二回事情聴取はスムーズに進んだのだが……

「はあ、つまり何。あれから都村君はほとんど喋らず、それにあん
たが話しかけまくって喋り続けて、それで終わり!？」

『う、うん。でもね? でもでもね? でもでもでもね?』

「でもが多い」

『デモンストレーション!!』

「なんのデモかは知らないけど浮かれすぎ」

『ごめんね! でもね、都村君だってちゃんと話を聞いてくれてた
んだよ』

「へえ。例えば?」

『私が話しかけてもね、大体はボーっとしてる感じなんだけど、ち
ゃんと時々ニコニコ! って笑ってくれるんだよ!』

「ニコニコ? あの無愛想な男が? にわかには信じられないわね」

『そんな! 都村君だって笑うよ。美味しいもの食べてるときとか』

「……あの、可牧？ あんたが言ってたその、笑ってくれるときは、都村君は何か食べてた？」

『うん、そのときどころかずっと食べてた』

それ美味しいもの食べたから笑っただけでしょうが！！

ミサはそう言いたかった。でも我慢した。せっかく可牧がこんなに幸せそうに語っているのに、それを邪魔したくなかったのだ。

「ほ、他にはないの？」

『あるよ！ えっとね、私ね、初めて冗談を言ってみたの！』

「初めて……ああ、あんたはいつも本気でボケてるからね。それで？」

『うん、失敗しちゃった。私の冗談、絶対おもしろくなかったと思う。でもねでもね、都村君ったら小さい声で、うめえ、って言うてくれたの！』

だからそれ美味しいもん食べてたからだってば！！

ミサはそう言いたかった。でも我慢した。せっかく可牧がこんなに幸せそうにバカっているのに、じゃなくて語っているのに、それを邪魔したくなかったからだ。

「——ずっとこんな感じだったわ……なんでそんなに噛み合っ

いのに凹んでないのよあの子は！ 凹んで泣きながら無差別な方向にすっ飛んでくあの子の思考がおもしろいのに！」

「いい趣味してるねー」

「ふん、褒めても何も出ないわよ」

褒めてるつもりはないので遠衣は一向に構わない。

「それでミサ嬢。どうする気なん？ このまま放っておくわけじゃないんでしょ」

「当たり前よ。可牧が登校してきたら早速、文句を言ってやるわ。つまらないからもっとおもしろくなりなさいって」

「お、噂をすれば」

壁際にいたのが幸いしてか――ミサに吹っ飛ばされたせいだが――遠衣は窓の向こうに見える校門付近をちょこまか動く見知った物体を、すぐに発見することができた。

「あら、可牧が来たの？」

「ああ、男と一緒にだ。あれが噂の彼氏君？」

「なんですって！？」

想定外の事態に慌てて窓に駆け寄るミサ。ギラリと凄みを増した彼女の瞳は一瞬でその二人、一緒に登校する可牧と都村のカップルを発見した。

カップル……に、見えなくもない。特に腕を組んでいるわけでも手を繋いでいるわけでもないが、歩く都村を子犬のように追いかける健気な可牧の姿は、尽くすタイプの彼女っぽい。

「可牧、幸せそう……」

ほろりと涙を浮かべるミサ。これだけなら友達を心配する美少女の絵として申し分ないのだが、

「つまんない……」

思ってることは極めて自分勝手なのだった。

「でも可愛い……」

そう、極めて自分勝手である。繰り返すが。

「もう待ってられないわ！ 玄関で待ち受けるわよ、来なさい遠衣！！」

「ほいさー」

ここで「なんで僕が」とか言わずにホイホイついていくのも仲のいい証拠である。もっとも周囲からは金魚のフンか舎弟にしか見えないのだが。

そして、舞台は靴箱前の廊下。

一足遅かったのか、待ち受けてやるはずだった二人とその廊下でバツタリ出会ってしまった。そんな急な事態にもミサは慌てず騒がずニツコリと、

「おはようコノヤロウ」

いきなり戦闘開始である。

「あ、ミサちゃんおはよ!! 遠衣君もおっは! どうしたの、こんなところで」

喧嘩ごしのミサの態度も気にせず、元気いっぱい挨拶する可牧。都村と一緒に登校できたことが嬉しくて仕方ないらしい。それに気づいてミサの頬がひくりと動く。

「ちょっと二人に話があってね」

「あ、僕はチョコについてるおまけみたいなもんだから、お気になさらずにね」

「そんな! おまけ付きのチョコって子供に人気なんだよ! 私は今でもたまに買ってるし」

「そんなことは誰も聞いてないわよ! それよりも可牧、あんたずいぶんと熱心に話しかけてるわよね、その人に」

「え、うん」

皮肉げに言ってもまったく反応しないその人。ミサの額に青ス

ジが浮かぶ。

「ねえ可牧、その人はさっきから、いったい何をしてるのかしら？」

「歩きながらも一心不乱にあんパン食べてる」

「あんたの話、聞いているの？」

「さ、さあ……でもね、ホラ！　きっと都村君は亭主関白なんだよ！！　や、やだ自分で言ってて恥ずかしい。亭主だなんて……いゃん」

聞いているほうがイヤンである。

「……こら、その人！！　いかげんに何か喋ったらどうなの！！？」

痺れを切らしたミサが都村の肩を握りつぶす勢いで掴んだ。

「んだよ、俺は今あんパンに忙しいのによ」

食べてばかりのわりには筋肉質な都村君はビクともしない。しかしようやくこちらを向いた彼の顔を、ミサは薄く笑いながら睨みつける。

「あんたさ、人の話が聞こえてないわけ？」

「聞こえてるよ。おまけ付きのチョコの話だろ」

「そんな話は一瞬しか上ってないわっ！」

都村の頭の中はとことん食べ物でいっぱいのようなようだ。

「どういうつもり？」

「あん？ 何がだよ」

「どういうつもりで可牧といえるのか聞いているのよ!!！」

ミサは本気で怒っていた。その理由は先ほどから言っている通り、おもしろくないから……ではない。

ミサは可牧の親友だった。だからうまくいくにせよ、いかないにせよ、可牧の反応を見ていれば満足だったのだ。だから本当に気に食わなかったのはこの男。嬉しそうな可牧に大して反応を見せようとしない都村こそが、本当の苛立ちの原因だったのだ。

「どういうつもりって……」

ミサの目が鋭くなる。軽薄な答えだったら即殴ると、その瞳が言っていた。

そして、都村の答えは、

「可牧って誰だ」

それ以前の問題だった。

「あ、あ、あんたねえ!!！」

付き合ってる子の名前くらい知ったとき

なさいよ!」

「んなこと言われてもな。あいつが自己紹介しねーのが悪いんだろ」
可牧に視線が集まると、彼女は気まずそうに頬をかきながら言った。

「いちおー、最初あたりにしたはずなんだけど、なあ、なんて」

「あー。んじゃ食うのに忙しくて覚えてなかったんだな」

あっけらかんと言う都村。ミサの怒りは臨界点をすでに突破、逆に冷静になりつつあった。

「そおお……じゃあ、もう一回、自己紹介でもすればああ?」

わなわなと震えながら言うミサ。都村は彼女がなぜ怒っているのか理解できずに首を傾げる、が、意外にも律儀に可牧の前に立って彼女を見据えた。

「俺は坂頼都村。おまえは?」

「わ、私、蛍衣可牧です!!」

面と向かって話すのはいまだに緊張するのか、上ずった声で答える可牧。対する都村は顎に手をやり、感慨深げに呟く。

「ほたるい、かまき?」

「は、はい!!」

「ホタルイカ巻き……うん、いい名前じゃねえか」

「あ、ありがとう!! えへへ、褒められちった!」

それを聞いていたミサ、遠衣、そして通行人までもが思った。こいつ、絶対いま“美味そう”って思ったな、と。

「……それで、都村。あんたは名前も知らなかった可牧と、なんで付き合ってたわけ?」

「飯が食えるから」

「この——!! 可牧!?!」

「あ、私は都村君が格好いいから!」

「あんたらいつぺん恋愛小説でも読んでこい!!!」

いくらなんでもあんまりなカップルっぷり。普段は超然としているミサも、さすがに今日はキレ放題サービス期間開始である。

そんないつもと違う様子の級友を心配してか、“待て”と言われた犬よろしく後ろで黙って見守っていた遠衣が動いた。ギリギリと歯を食いしばって怒りの火山がドツカンするのを堪えているミサの肩を掴み、二人から一旦遠ざけた。

「まあまあ、こっちへ」

「なによ遠衣。あたしはあの二人に話が!!」

「まあまあまあ、落ち着け。その熱いマグマを口から吹き出す前に、僕の話聞くまいか」

「……何よ」

「二人のことは心配するなミサ。僕がどうしても君と一緒にいると思う？」

「な、なによ唐突に……どうしてだって言うのよ」

「顔がいいからさ！」

「……もう一度言ってみなさい」

「顔だけはいいいからさ！」

「だけってつけるな!!」

「ともかくそういうわけで、可牧の気持ちはよくわかるのよん。他人のいいところなんて口に出すのは難しい、ってね」

軽い口調に真剣な響き。矛盾した遠衣の口調に、ミサは思わず口つむぐ。

「しかも二人は付き合い始めたばかりかしよ？ 相手のこともよく知らないのに“ここが好き！”なんてハッキリするわけないやん。ドラマでも漫画でもないんだから」

「……そう、よね。言われてみれば」

「うんうん。ミサ嬢の好きなラブドラマや漫画じゃないんだから」

「なぜそれを繰り返すのかしら」

「友達の恋愛に夢見るミサ嬢！ かーわいーぶばっ!？」

急にいつもの調子に戻った遠衣を張り飛ばすと、ミサはつかつかともう一度都村の前に立った。

「ねえ、あなた」

「……もぐもぐ」

「食うのをやめなさい!!」

「んぐ、んだよ。うるっせえな」

「あなた、この子のこと好きなの？」

きょとん、とあんパンを加えながら目を丸くする都村。可牧も同じ顔をしていて、遠衣は小さく「直球だわん」などと呟いていた。

都村はしばらく目をぱちぱちさせて、

「ああ」

臆面もなくハッキリと頷いた。あまりの潔さに拍子抜けするミサ。そしてボン！ と顔を爆発させて卒倒する可牧。さっきまでミサの中にあった火山がいつの間にか移って噴火したらしい。近くを通っ

た生徒が二次災害を恐れて避難した。

「え、えっと」

ミサは狼狽しながらも深呼吸、すぐにいつもの顔に戻り、まるで脅すように言った。

「じゃあ、デートしてきなさい！」

「ああ、いいぞ」

またもやきっぱりと都村。今度はミサも驚かなかった。

デート、それすなわち恋人の登竜門。これを以ってこの男の真意を確かめようと、ミサは密かに闘志を燃やすのだった。

人の恋路なのに。

「じゃあちゃんと可牧と待ち合わせとかするのよ？」

「おう。それでよ、何を食いにいくんだ？」

「あんたいっぺんデートって言葉の意味を辞書でひいてこい！！！」

前途は本当に多難である。

第三話 美味しそうな改造計画

関係ないはずのミサの進言によって決まってしまったデートは、可牧の頭をイカれさせるには充分なものだった。

「この子が好きなのか」というミサの問いに対して都村が「ああ」と言ってから先、可牧に記憶がない。単にオーバーヒートして可牧の精神がどっかに路中したまま動かなかったただけなのだが、動き出した途端にデートと聞かされ、一瞬でエンストしたのは言うまでもない。

茫然自失のままミサと遠衣に教室まで連れていかれ、再び脳が動き出したところにはいつの間にか授業中だった。

「ここ読んでみろ。えーと、蛍衣」

「はい！ いつでも元気な蛍衣です！ 蛍よりも光ってます！」

「そんなこと書いてないぞー」

訂正、脳みそは全く稼動していなかった。

ただし“まともに”稼動していないだけで、一応動いてはいる。そう、こんな風に――だってデートだよ、デート。昨日ようやく付き合い始めたっていうのに、もうそんなことしちゃっているの！？ 捕まらない！？ 犯罪じゃないのかな！？

「逮捕だ！！」

「蛍衣よー、よーわからんけど逮捕されるようなことしたのか？
するのか？」

「デートします！！」

その瞬間、教室が爆笑に包まれた。

昨日、可牧に彼氏ができたことは周知の事実だ。なので「おめでとー！」だの「うまくやれよ！」だの「このスケベ」だの温かい応援のオンパレードである。

そんな大騒ぎを見て、先生は、

「デートするだけなら逮捕はされんよ。だが行き過ぎると逮捕だからなー」

他のクラスメイトと同じく、温かい目で忠告してくれるのだった。不思議なことに可牧が付き合い始めたのは職員室にまで知れ渡っているのである。理由は……単に可牧が目立つから。

そんなわけで、その先生が職員室で話したのかー午前中のどの授業を担当する教師も一回は可牧を当て、そのトンデモな反応をみんなで楽しむことになるのだった。

そして、ようやくお昼休み。

いじられ地獄から開放された可牧は、ここに至ってようやく冷静さを取り戻し、

「可牧、今日はどうするの？」

「デート!!」

「落ち着け」

取り戻してなかった。

「お弁当か学食かって聞いたのよ」

「え、えと。お弁当」

「よし、じゃあ一緒に食べましょう。そしてあんたが気になってるデートのことについて協議しようじゃないの」

ミサは可牧の前の席に座り、椅子を後ろに向けて机を共有する形になる。

「あ、あの。みそ——ミサさん。そこ、僕の席」

「貸して♪」

「ははーっ」

微笑むだけで平伏し、去っていくしかない哀れな男子生徒。その美しさと口汚さから『ミサには手を出すな、口はもつと出すな。』というのが学校全体の共通見解である。遠くから見るに限る生き物なのだ。動物園のライオンとか虎とか豹とか、そんな部類。

「あ、僕も一緒にご飯食べたいな」

可牧の隣の席の男子に断り、可愛らしいお弁当の包みを持参して椅子を寄せてくるのは……朝からミサに犬扱いされていた遠衣である。何の因果かお弁当の包みも犬柄だった。

「遠衣君！ ど、どうぞどうぞ」

「あら可牧。犬にも同席を許すなんて優しいにもホドがあるわよ？」

「あらん、ミサさんのお言葉は優しくないにもホドがあるわよ？」

冷やかな言葉に負けじと言い返す遠衣。しかし女言葉は気持ち悪かった。

「あたしはとても優しいわよ。なにせあなたが三べん回ってワンと言うだけで同席を許してあげるんだから」

「三べん回ってワン!!」

「……言っただけじゃないの」

「そう言えって言ったじゃん」

三べん回って、ワンと言う。この読点が無ければ通じる屁理屈だ。

「ま、いいけどね。そんなことよりも可牧の様子が気になるし」

「へ、私!？」

「そうだよ可牧。いつもなら僕の代わりに三べん回ってニャーって言うくらいはするだろうに」

「あ、いや、その、考えごととしてて……にゃは、ごめん」

ノリきれなかったことにわざわざ謝る律儀な可牧。勢いがつけば一気に加速して突っ走るが、一気に減速するのも可牧の特徴だ。

「だってさあ……デートって、恋人同士がすることでしょ？ 私たちがしていいのかなあ、なんて」

「あんたたちはもう恋人同士でしょ」

「こいびと……」

ミサの言葉をかみ締めて真っ赤になる可牧。

「変人同士でもあるけどねえ」

「へんじん……」

遠衣の言葉もかみ締めて真っ赤になる可牧。

「ここ、恋人同士って何すればいいのかな！？ あと変人同士も何すればいいのかなあ!？」

「恋人は知らないけど、変人同士はとりあえず変なことすればいいと思うよ」

「遠衣、あんたちょっと黙りなさい」

とことん茶化そうとする遠衣の口に、ミサは自分のお弁当に入っていたタコさんウィンナーを詰め込んで黙らせる。

「むぐむぐ……てへ、ミサ嬢にぁーんしてもらっちゃった」

「キモいこと言わないで」

「でもまずかったのはなぜだろう」

「ぁんたタコ嫌いじゃない」

「なるほど!」

全然黙ってない遠衣であった。ミサの付き合いのよさも原因だが。

「タコは放って置いて話を戻すわよ。可牧、ともかくぁんたはデートするの! それに必要なものが、なんだかわかる?」

突然の質問に可牧は目を泳がせる。クロールして平泳ぎしてバタフライしようとして失敗して、ようやくミサの目へと視線を合わせることになった。

「わかんない」

泳ぎまくった意味はなかったようである。

「いい? デートに必要なのは計画……このあたりは後で考えると
して、一番最初に決めるべきは――服よ」

正確には“いろいろ置いといて真っ先に決めることができるもの”なのだが、色恋に疎い可牧は大マジメに頷くのだった。

と、いうわけで放課後。

今後の方針が決まった――いや、ミサに決められた可牧は繁華街へと拉致された。可牧は都村と一緒に帰りたがったが、次の休みまで時間が無いのでデートの日程だけ約束させて引き剥がした。

そしてミサの行きつけの店へと連れてかれた可牧は、彼女に言われるがままに着せ替え人形になっていた。

「うう……なんか高そうだよお。場違いっぽいよお」

「何言ってるの、あんたあんまりお小遣い使わないから結構あるでしょ？　こういうときくらい奮発しなさい」

ミサはそう言うが、可牧にとっては見知らぬ国にでも来たも同じだった。女らしさ、というものが希薄な可牧は、服飾に関しても男らしく、安くて機能的なものを選ぶ。だから今いる店のような綺麗どころな場所には寄り付かなかった。もちろん可牧も女の子、ひらした女の子らしい服を遠くから見ただけで憧れてはいたのだが……どちらかといえば少年っぽい自分には似合わないと思われ、店に入ることはなかった。

決して値札を目にしたくなかったわけではない、と可牧は言い張っている。ミサに連れられている今でも値札に視線を近づけないのは、絢爛な服に目を奪われているからである。多分。

「居心地わるいよー」

そんな中、可牧と同じ意見の男が一人。

「ついてきたいって言ったのはあんたでしょ。今さら文句言ってるじゃないわよ」

「そうだけどさあ……だから早く選んでくれよ。それで可牧のファッションショー見せてよ。それが目当てで来たんだから。あ、ミサ嬢でもいいよ？ 見た目だけはいいんだから中身を忘れて見ればそれはそれは素晴らしく――」

「なんならあんたが着てみる？ きつとあたしなんかより素晴らしくいわよ」

素晴らしく誰もが絶句しそうな意見に、さすがの遠衣も押し黙る。

「あ、こんな服はどうかしら」

所在なさげに歩く二人を連れながら、ミサはようやくお眼鏡にかなった一着の服を手にとった。広げて可牧の肩につけて合わせてみる。

「ええ……ちょ、ちょっと胸元が開きすぎじゃ」

「何言ってるの。揉まれやすくするために開いておかないと、いざというとき面倒でしょ」

「揉むっておっぱいを!?　だだ、ダメだよそんな、おっぱいを揉むなんて、それに、私そんな揉めるほどおっぱいなし、ミサちゃんくらいおっぱいあるならおっぱい星人さんもお満悦なんだろうけど私のおっぱいはドラ焼きにも負けそうだし!!」

「おっぱいおっぱい連呼すな」

ただでさえそわそわして怪しいのに……とミサはさすがに周りを気にしだす。本人にはわからないだろうが、冷静なミサにはちゃんとわかっていたのだ。自分が変なのを連れてると。

「僕はドラ焼きとどんな勝負してるのかが気になるが」

「そそ、それにおっぱいなんか触ったら、大変なんだから!」

「何がどう大変なのよ」

「子供ができる!!」

「すげーな可牧のおっぱい。子供産めるんか」

すつとぼけた遠衣の意見に、もーいいやと諦め気味になったミサはノッてみた。

「ちょっと見たいわね。揉んでいい?」

「いーやー!!」

すでに周りの注目を集めまくっているが構わない。楽しければいいや、と開き直ったミサは、その後も次々に服を選んでいった。

「とにかく美味しそうな格好して誘惑するの。そうすりゃ食いつくでしょ、都村君で暴食っぽいし」

「お、美味しそうってどうすれば……焼き目とか入れればいいのかな!？」

「入れれるもんならね」

イカ焼きとして美味しく食べられるでしょうよ、と冷たく返すミサ。イカ焼き好きな遠衣は何を想像したのか幸せそうだ。

「じゃ、じゃあお肉屋さんとか魚屋さんに行ったほうが」

「そこで何着る気よあんたは! いいからこれ全部! 順番に着てみなさい!」

実は店頭にぶら下がっている魚や肉でも肩から下げる気だったのだが、さすがに吹っ飛びすぎた考えだと気づいた可牧はおとなしく頷いた。すぐに混乱して妙な思考に走るのは彼女の短所である。見る分には面白いので長所とも言えるかもしれないが。

——そして、可牧のファッションショーが始まったのだが。

「こ、これ、どうかな?」

いつも着ている服装に似た、シンプルなシャツにパンツ。

「地味ね」

「つまんない」

次。

「これは？」

思い切ってミニスカートに手を出してみた可牧さん。

「なんか変じゃね？」

「……可牧、スカート裏返しになってる」

新品の商品をどうやって着たらそうなるのか、という謎を残しつつ、次。

「スカートは……やっぱロングのほうがいいなあ」

「でもやっぱ変だぞ」

「ごめん、サイズ間違った。可牧、それスカート上げすぎ。胸までいってテルテル坊主になってる」

「あ、じゃあデートの日は晴れるかな!？」

「……あー、そうね。晴れるといいわね」

晴れてるのはあんたの頭よ、とミサは感心しつつ次を指示。

「私、これ一番好きかも!!」

とてつもない笑顔で可牧が着たそれは、なんとパンダの着ぐるみだった。

「どっから持ってきたのよそんなもん!」

「パンダっておいしいかなあ。都村君好きかなあ」

「聞けよ!!」

「むう、ファッションショーなのに期待したエロスがないよう、可牧だから仕方ないのか」

「遠衣君!」

「な、なんだ。怒ったか?」

「エロスってどんな食べ物!」

「あなた彼氏の影響受けすぎですよ!」

と、なんだかんで元気な可牧を着せ替えまくり、試行錯誤の末……

「こんなとこね」

「おお、こんだけやって始めてファッションショーっぽい格好だ。ショーのくせに見えるファッションが一つとはこれいかに」

女の子らしい服を着慣れていない可牧は、服飾の組み合わせなん

て全くできない。だがそれなりに様々な服を着まくったので、ずっと見ていたミサが『こうしたら似合うでしょ』とコーディネートした結果がこれだった。

上は涼しげな水色のキャミソール、白いレースの清楚な雰囲気、純情な可牧に似合っている。下はふんわりとした白のロングスカート、こちらもレース付きで、全体的に女の子らしいファッションだ。今までの可牧には無かったスタイルである。

「す、すごい。私、女の子みたいだ!!」

今まで自分をなんだと思っていたんだ、とミサも遠衣も思ったが、なにやら普通に感動してるらしい可牧の嬉しそうな顔を見て押し黙った。

なんだかんだ言って、二人は可牧のこういう顔を見たかっただけなのだ。

「――さ、決まったら早く会計すませましょ。次は靴を見ましょ。か。アクセが先でもいいけど」

「靴なんか見ないけどな、僕だったら」

「足元から気を使うのがいい女というものよ。ほら、可牧も早く」

「あ、うん!」

それからしばらく、可牧改造計画は続いた。

三人とも大いに楽しみ、それでいてしっかりと可牧のデートスタ

イルが決まっていたのだった。

「ミサちゃん……私を女にしてくれてありがとう!!」

「誤解を招くようなこと言わないで」

「僕も男にして!!」

「女にならできるけど」

金!!

「おおおっ!! け、蹴った、金を蹴ったなあああ。使い物にならなくなったらどうする!?!」

「だから、女になれば?」

そう、とても楽しく。

可牧のデートはもっと楽しくなるように、願いながら。

第三話 美味しそうな改造計画（後書き）

読んでいただき、感謝です。

少しでも楽しんでいただけたなら幸いです^^

コメディのほうのカカの天下とは違い、こちらはまったく更新していききたいと思っていますので……続きが気になる方がもしいましたらば気長にお待ちくださいな^^

第四話 デートで初めてわかること 前編

——某日。ついに可牧と都村のデートの日がやってきた。

天候は青空に程よく雲がかかり、絶好のデート日和。いつぞやの告白と比べて随分と空はご機嫌なようだ。それは可牧の日ごろの行いがよかったからか。

いや、きつとそうだ。そうに違いない——可牧は勝手にそう思うことにした。自分の日ごろの行いを見て「バカだこいつ、あはは」と空も笑ってくれたのだと。

この少女、実は自分のバカさ加減に少し自覚があったりする。

「よし！ この調子でデートもぶっ飛ばすぞー！！」

「ぶっ飛ばしてもいいの？ 可牧が言うならやってもいいけど、後には何も残らないわよ」

「いや、残るぞ！ 後悔と涙がね」

「やーめーてー！！ 前言徹底！！」

「徹底的にやれてさー」

「まあ可牧がそう言うなら喜んで。遠衣、ナイフ持ってらっしゃい」

「は。ここに」

「てっかい！ てっかい！！」

自覚があっても可牧は可牧なのだった。

「さて、そろそろ待ち合わせ場所よ。あたしたちは退散ね」

ミサがそう言った瞬間、可牧の顔がアオミドロになった。アオミドロは色じゃないが、とにかくそんな感じである。フィーリングで感じてほしい。

「で、でで、でもお」

アオミドロがもごもご言っているうちに目的地に到着した。可牧が住んでいる街から比較的近い場所にある遊園地だ。有名な場所ではなく、定番の乗り物は一通りそろえているものの特に目玉は存在しない。しかしそれほど都会ではないこの辺りでは数少ない娯楽施設の一つで、今日のような日曜日にはカップルや家族連れ等のお客が多く、そこそこ賑わっている。

「可牧、僕たちにできるのはここまでだ」

「じゃ、頑張ってね」

捨てられた子犬のような顔をする可牧を放り、去っていくミサと遠衣。

二人の背中が見えなくなるまで可牧はおろおろしていたが……やがて腹をくくったのか、待ち合わせ場所である遊園地の入り口へとカキン、コキンと硬い稼動音を鳴らしながら歩いていった。

——そして、それを見つめる視線が道端の木陰から二人分。去って行ったかに見えたミサと遠衣だ。二人は当然のごとくデートを監視するつもりだったのである。

いや、監視というよりは観覧という言葉が正しいだろう。最初から傍観者な遠衣はもちろんデートの原因を作ったミサも、すでに可牧と都村がくつつくことに関して異論はなかった。都村命と豪語する可牧に何を言っても無駄というのがここ数日で理解できた、という理由もあるが……すでに『細かいこと気にすんのやーめた。この子見て遊ば』としか思っていないのだ。

「あ、都村が来た」

「隠れて！」

コソコソと二人に見守られているとも知らず都村が現れた。可牧もそれに気づき、慌てて心の中で挨拶の予行練習を始める。

（いい、可牧！ こういう待ち合わせでの定番は——そう！ 待った？ って相手が声をかけてくれるから、今きたところ！ って答えるのよ！）

そんな張り切りまくる可牧とは裏腹に、都村は学校で見る様子と全く変わらない、リラックスした——いや、ダラダラした歩き方で可牧へと近づいていく。

「何よあの格好！ やる気あるのかしら」

「都村がやる気見せたほうが怖いけどね、僕は」

地味なジーパン、地味なTシャツ、いつもの髪型——気合を入れた可牧とは対照的な格好の都村を見た外野からの野次が飛ぶ。そんな外野の文句は当然二人に聞こえるわけもなく。

ついに都村は可牧の目の前へ！

「よう。便所どこだ」

「今きたところ！」

「どこだよ」

いきなりすれ違う会話はさすがである。ともあれ、アワアワ言いながら入場口のトイレを教えるところから、ようやくデートは始まった。

ぎこちない二人のやりとりを遠目で見ているミサと遠衣。街路樹に身を寄せ合って隠れているのだが、くつつきすぎて遠衣が微妙に鼻の穴をひくひくさせて興奮していることにミサは気づいていなかった。

「……声が聞こえにくいわね」

「そりゃこんだけ離れてればね。はふー」

「遠衣、遠目から唇の動きを見て会話を読めたりできないの？」

「読めるよ。はふー」

「ほんと!?　ところで、はふーって何」

幸せな音である。

「気にしないで。とにかく読めるよん。うん。例えばね」

そう言って、ジッとミサの唇を見る遠衣。

「な、なによ。あたしの見てどうすんの」

「エロい」

遠衣は鈍い音と共に浮いた。

「バカ言っていないで、さりげなく近づくわよ!」

「ふあい……」

鳩尾をゴッスンされた遠衣は、先ほどの温もりを忘れないように
噛み締めつつ、可牧たちに近づこうとするミサの後を追った。カニ
歩きで。意味はない。

うまい具合に柱の影に隠れることに成功した二人は、普通のお客
さんの「なんだコイツら」的な視線を受け流しつつ、トイレから帰
ってきたっぽい都村と可牧の会話に聞き耳を立てた。

「なあホタルイカ」

「違う!　それ名前と違うの!」

「あん？ そっちのほうがいいと思うが」

「ふ、普通に考えて、自分の子供にホタルイカって名前つけないでしょ！」

「俺だっただけで美味そうな名前つけるぞ」

「あ、やっぱ食べ物なんだ。ステキだね！」

「ステーキって名前はさすがにねえな」

なんつう会話だ……柱にピッタリコンビは呆れていた。

「ところでよ、その服いいな」

「「「えっ!?!」」」

可牧はもちろん、隠れている二人も思わず驚いてしまった。あの食欲魔人の都村が、女の子の服を褒めるなんて……！

「それキャミソールだろ？」

「う、うん」

「ミソが入ってる。いいモンだ」

その服は味噌汁じゃないのよ!?! と少なからずミソに因縁があるミサは思ったが、ここでツッコむわけにはいかないと必死にこらえた。

一方、可牧はというと……

（えっと、ミサちゃんと言うには、相手に食べられるくらいの服を着ろって話だったから、この服はミソだから、えっと――）

「やった！　ありがとう！！」

「褒めてないよ！！　それ褒めてないよ可牧！！　喜ぶとこじゃない！！」

「こ、こら。あたしだって言いたいののは山々だけど我慢してるんだから！　静かにしなさい！！」

思わずツツコンでしまった遠衣の口を、ミサは慌てて押さえる。
おそろおそろ柱の影から二人の様子を見ると……どうやら今の声は聞かれていなかったらしい。

「さ、中に入ろう！　都村君」

「おう。ところであの着ぐるみは何だ。この遊園地のマスコットか」

「あ、うん。そうだよ！　パンフレットに書いてあった」

「ゾウだよな、あれ？」

「うん！　この遊園地がゾウに踏まれても潰れませんように、って願いが込められてるんだって！　パンフレットに書いてあった」

「へえ。どうでもいいけどゾウって食えんのかな」

そこそこ楽しそうに入場する二人の後を追いつ、ミサたちも入場口へと急ぐ。

「ほら遠衣、入場料金その他もろもろよろしく！　あたしは二人を見失わないようにしてるから！」

「あいよー」

ミサは入場口の柵に張り付き、可牧たちの後ろ姿を見る！

見る！　とことん見る！

目を皿のようにして見る！！

親の敵でも見るかのように見る！！

見すぎて目が疲れた！！

「遠衣、まだ！？」

二人が曲がって見えなくなった角を記憶してから、ミサは入場の手続き中の遠衣を見た。

「そうそう、あいつ僕の彼女」

「へえ！　お綺麗な方ですね」

「でっしょ。あなたもかなり綺麗だね」

「まあ」

「あはは、でもあいつがさ、連れてってくれなきゃ泣いちゃうゾウ！
とか言うからさあ、今日はここに」

その“あいつ”が誰か把握した瞬間。

どかばきずこーん！ とコメディちっくな炸裂音が容赦なく響いた。

「にゃ、にゃにお……」

「それはこっちのセリフよ。何をしてたの」

「入場料金は払ったから……そ、その他もろもろの部分を」

つまりは余分な会話をしていたわけである。ナンパとも言いかもしれないが、ミサを彼女とか言ってるあたり微妙なところである。

「そこで死んでろ」

「つ、連れてってくれなきゃ泣いちゃうゾウ」

「勝手に泣けば」

見失っちゃまずいとばかりに走り出す可牧。

「ま、待ってくれよう！ ぐ、ぐぐ……今やられた僕のゾウさんが痛くてなかなか走れないぜい」

フラフラしながらも健気に追いかける遠衣。

そんな二人を見送りながら、遊園地の女性職員の人は、

「若いつて良いわねえ。憧れるわ。エレガントだわ。エレファントなら向こうにいるけど」

不細工なゾウの着ぐるみを眺めがらそんなことを呟いた。

——そうとも知らず、知る必要もなく。ミサと遠衣は見失った可牧たちを必死に搜索！

やがて、なんとか無事に可牧と都村を発見することに成功した。ちよūdどアトラクション施設から出てきたところだったのだ。その施設とは——お化け屋敷。

「また意外なところに入ったもんね」

「可牧はこういうの、意外と好きなんだよな。キャーキャー言いつつ」

「あんたよく知ってるわね」

「イタズラで可牧の机の中にホラー雑誌入れたことある。そしたら叫びながらページめくってた。あれ外でやったら捕まるね」

「簡単に想像できるわね……さ、近づくわよ」

またもやカニ歩きで近づき、二人の会話を盗み聞きする。

「都村君、どうだった？ お化け屋敷」

「腹いっぱいだ」

「よかったね！！」

ミサと遠衣の頭上に、はてなマークがいっぱい浮かぶ。

「なんでお化け屋敷で腹いっぱいになるのよ」

「僕に聞かれても……幽霊食べたとか？」

「さすがにそれはないでしょ。中に食堂でもあったのかしら」

「あ、わかった！」

遠衣が何かを思い出したようにポンと手を叩き……

「うえ」

それから渋面を作った。

「どうしたのよ」

「思い出したんだ。友達がここのお化け屋敷に入ったことあるって
言ってたんだけどさ」

「なによ。本当に食堂あるの？」

「そいつはこう言った——聞いてくれよ、そこのお化け屋敷、いま

どきこんにゃくなんか吊るしてあるんだぜー？　って」

こんにゃく。それは問答無用で食べ物である。

「食べたの、かしら」

「たぶん。お腹いっぱいとか言ってるから、吊るされてるの全部……」

ちなみに都村が今ゴミ箱に捨てた包みは、お化け屋敷に入る前に買った味噌カツ串の包みだったりする。買うときに味噌を多めにもらい、こんにゃくにつけて食べた、と二人が知ったらなんと思うだろうか。また味噌だし。可牧は都村の美味しそうに食べる姿を見て「ステキ」などとほさいていたらしいが、その目は節穴だと言わざるをえない。

「き、気を取り直して追うわよ！」

「おもしろいことに変わりはないやね。次は何してくれんだあ？」

――しかし。そのお化け屋敷が特別だったのか、その後のデートは意外とスムーズに進んでいった。

例えばコーヒークップを前にして。

「私ね、これ好きなの！　回ってるとね、目が回ってね、脳みそも回る感じがするから頭が良くなる気がするの！！」

それ確実に悪くなってる、とミサと遠衣は心の中でツツコんだ。

「俺はコーヒークップよりも」

「え、メリーゴーランドのほうがよかった!? お馬さん!」

「馬刺しもいいがな、違う」

刺すな、とミサと遠衣は心の中でツツコんだ。

「カップでコーヒーよりも、パックの牛乳のほうが好きなんだよ」

「あ、都村君があんパン食べてるときはいつでも牛乳だもんね!」

「牛乳パックって乗り物ねえかな」

コンビニ行って買って飲め、とミサと遠衣は心の中でツツコんだ。

さらに例えば。道中での会話。

「ね、ねえ都村君」

「あんだよ」

「キス、とか……どう思う?」

おお、なんて積極的な会話なんだ可牧!! とストーカー二人がいきり立つも、

「あん? バカかおまえ。キスの匂つつつたらもつと夏場だぞ」

「き、キスって匂があるの!?!」

「つたりめえだろが」

「そそそうなんだ知らなかった。じゃー夏になったらできるんだね！」

「おう、いろいろ料理してやつぞ」

「りよ、料理されちゃうんだ……えへへ」

天ぷらとかにすると美味しいよねーそのキスって魚、とミサと遠衣は心の中でツツコンだ。

「あれだけズレてるのに会話が進んでるのがフシギでしょうがないわ」

「しかもいつの間にか釣りに行く話になってるし……変な会話ばかりだけど、うまくいつてるんじゃないっすか？」

半分楽しいもの見たさ、半分配で後をつけてきたミサと遠衣の目的は、そろそろ果たされそうになっていた。

可牧は笑っている。

あの仏頂面の都村も、そこそこ楽しんでいるようだ。

いまや、どこからどう見てもあの二人はカップルだ。そう改めて心の中で呟いて……ミサはなぜかため息をついた。

「どしたのミザリーちゃん」

「ザリっとな」

脊髓あたりをザリっとなられた遠衣は苦悶の叫びを上げながらのた打ち回るが、

「つつつ……どしたの、ミサ嬢」

地面に寝転がったまま、少し真剣な表情で聞いてきた。

「変な格好」

「なんだよ。心配してやってんのに」

まだ痛いのか地面で身体をくねくねさせている遠衣は顔だけはマジメだった。通行人は見て見ぬフリをしている。

「いつもならさ、“あたしはミザリーでもサリーちゃんでもザリガニでもないのよ!”とか言うだろ。親友とられてつまんない?’’

「そ! な! 別に! そんなんじゃない!’’

「ウサ晴らしに僕と遊ぶ?’’

その言葉に虚を突かれたのか、ミサは一瞬押し黙って――ふ、と小さく笑った。

「それも、いいかもね」

そして寂しそうに、自分の親友を見る。

「はふー！ 私、幸せだよ都村君！」

「んだよ、そんなに釣りに行ってみたかったのか」

楽しそうに会話する二人。

「うんうん！ か、彼氏さんと何かするのはね、なんだろうと、か
かか、彼女さんとしては、嬉しいのだよ！！」

今は言うのにいちいちもっているけど、いつかは彼氏、彼女な
んて単語もあっさり出てくるようになるだろう。

「……彼女？」

「うん！」

そのとき、あたしはどう思うかな。遠衣の言うとおり、つまんな
いと思う？ そうかもしれない。でも――

「誰が？」

「私が」

二人が幸せなら、それでいいか。

「誰の？」

「都村君の」

そう、あんな風に幸せなら――

「初めて聞いたぞ」

あんな風に――

あんな風。

あん、な？

「「は？」」

感傷に浸っていたミサも。それを温かく見守っていた遠衣も。もちろん幸せ気分だった可牧も。

一斉にそれどころではなくなった。

第四話 デートで初めてわかること 前編（後書き）

かなーり遅れてしまいましたが、ようやく更新です^^；

私の中でこの作品は娯楽中の娯楽。優先順位は低いので、このように更新が前後することもあると思いますが、また気長にお待ちいただけると嬉しいですよ^^

ですが、まあ……このまま引っ張るのはアレなんで、今度はもっと早く更新します笑

第五話 デートで初めてわかること 後編

デートに最適と思われた天気。

うまくいくかと思われた展開。

そんな清々しいっぽいものを全て吹き飛ばすかのような爆弾発言が、都村の口から炸裂した。その言葉はなんか放射能っぽくその場にいた人間——可牧、ミサ、遠衣までをも衝撃をもって貫いた。

「……あ、あの？」

「んだよ。どした」

「……わ、私、告白、しましたよ、ね？」

「はあ？ いつだよ」

都村の表情にふざけている様子はない。そもそもこの男が冗談を言うところなど誰一人して見たことはなかったが。

「あ、あの！ 中庭で、会ったとき、に」

「あんときか？」

都村は顎に手をあて、思い出すような仕草をしてから、あっさりと、

「落としたあんパンで頭がいっぱいで、聞いてなかった」

そんな呪文をとなえた。可牧は石化した。その石化を解くアイテムは……RPGではないので残念ながら無い。

「ちょ——ちょっと待ちなさいよおおおお!!」

「お、おいミサ嬢!？」

しかしその言葉があまりに頭にきたのか、こっさり後をつけていたことも忘れてミサが飛び出した。

「あん？ んだよ、てめえなんでこんなところに——」

「そんなことはどうでもいいのよ!! それより何よ今の言い分!! あんた、教室で言ったじゃないの! 可牧が付き合ってほしいって言って、それを」

「あれか? いや、あいつにあんパン奢ってもらったときに“また一緒にご飯食べようね”って言われたから、そのことかと」

ミサは絶句した。いまどきなんてベタなオチだろう。こいつは……この男は、“付き合っ”てという言葉を男女のそれとは関係ない、そのままの意味で捉えていたのだ!!

「じゃ、じゃあほら! 学校の廊下で! あたしが聞いたわよね! ? “その子のこと好き?” って! そしたらあんた“ああ”って頷いたじゃないの! そこはどう説明すんのよ! ?」

「その子ってあんパンのことじゃなかったのか?」

「んなわけないでしょが!!」

想像を絶する返答にミサは半分泣きそうだった……なによこいつ、なによこの展開、なんでこんな妙な偶然で、こんな最悪な事態に――

ミサはおそろるおそろる可牧を見た。

可牧はいつの間にか石化が解除されていたが、依然として死にそうな感じの状態異常にかかっているように顔色が悪かった。

「ねえ、都村、君……」

「ちょっと、可牧？」

今にも倒れそうなのその顔を見てミサが心配そうに声をかけるが、その先が浮かばない。

「あ、あんだよ」

その迫力にさすがの都村も顔を引きたらせる。

「都村君……さ」

「お、おう」

「私とあんパン……どっちのほうがいい？」

普段の都村ならば、紛れも無く「あんパン」と即答しただろう。

しかしさすがにこの展開、この可牧の顔色を見る限り、それは人

を一人殺すことと同義だということは鈍い都村にも理解できた。

「……その、な」

しかし、だからといってうまく切り返すほどの恋愛経験などあるわけがなく、結局は沈黙をもって肯定してしまうのだった。

「……ねえ、ミサちゃん？」

「な、なに」

「教えてよ……ミサちゃん。たくさん教えてくれたよね。これも教えてよ」

いつもバカみたいに元気な可牧が、こんな悲壮な表情をするなんて……ミサは親友の、負の感情の爆発を初めて目にして——怯えていた。

「どうやったらあんパンに勝てるのかな？」

このわけのわからん質問に、誰が答えられるだろう。

「私の身体にも、あんこ詰めればいいのかなあ」

冗談のように聞こえるグロいその質問に、笑って答えられる人間もここには存在しなかった。

「私は……私は……」

「か、可牧？」

「パン工場で製品化されるしかないんだあああああああ!」

妙なことを叫んで猛ダッシュ。砂煙をあげて爆走していく可牧を、そこにいた三人とお客さんたちは呆氣にとられて見送ることしかできなかった……

いや。

違った。

「おい」

一人だけ、いい意味で普段通りの男がいた。

「よくわかんねえけど、俺は追わなきゃいけないよな。こういうときって」

傲岸不遜なその態度。あまりにいつもと変わらない偉そうなそいつを目にして、呆然としていたミサは正氣に戻った。

「な、なによ。あんたが行って、何しようってのよ」

「よくわかんねえけど、あいつは俺が好きなんだろう?　じゃ、その返事をしねえとな」

ミサは再び呆けてしまった。この男が、こんなことを言うなんて。

「あんたが……あんパンより可牧を好きになるっての?」

セリフだけ見ればバカらしい質問だが、ミサの声は真剣だった。

だから都村も真剣に答えた。

「その返事を聞く権利はあいつしか持ってねえだろ」

ミサは思った。こいつ、都村は、食欲バカで、あんパンバカで、身体がでかくて鈍くて、どうしようもないやつと思ってたけど……実は、恋愛に関しては普通に硬派なのではないかと。

「……うん。行ってあげて」

「おう」

だからミサは送り出した。可牧が好きになった男を信じて。

そして――

「ちょっと待った!!」

普通に軟派なこの男、遠衣が立ちふさがった。なぜか。

「都村!! おまえに一言、もの申す!」

「んだよ。急いでんだけどよ」

遠衣は不敵に笑う。そして、ものすごく大きな声で言った!

「あんパンは一回食ったら終わりだろう……しかし! 可牧は何度でも食べれるぞ!! 性的な意味で――」

「ここにきてくだらないこと言ってんじゃないわよあんたは!!」

遊園地の恥さらしになる前にミサの飛び膝蹴りが入った。可牧を褒めてやろうとしたのだろうが……あまりにあまりなセリフである。

「……何が言いてえのかよくわかんなかったが、行っていていいか？」

「あーはいはい。行ってらっしゃい」

「いてらあ……」

巨体に似合わず素早く駆け出す都村を、地面に倒れたままの遠衣と、その背中にあぐらをかいて座るミサはひらひらと手を振って見送った。

そして、都村が走り出したころ。

いまだ爆走しているかと思われた可牧は、意外にも足を止めていた。

「ね？ 私って不幸だよね!？」

「いえいえ、そんな恋できるだけで幸せだと思いますよ」

なぜか遊園地の受け付け嬢さんに愚痴っていたのだ。

「私は……私はもうパン工場に行くしかないんだよ!」

「ええ、ぜひプレスにでも潰されてください」

「そしてパンになって……都村君に食べてもらうんだ！」

「ええ、ぜひ噛み潰されてください」

「……えっと」

さすがの可牧も受け付け嬢さんのブラボウな返答のおかげで正気に戻り、冷や汗をかいていた。

「あのう……？」

「はい？　なんですかコノヤロウ」

冷や汗に震えも追加された。

「もしかして、怒ってます？」

「まさかそんな」

受け付け嬢さんはハッキリとした営業スマイルを浮かべながら、

「こっちは仕事ばっかでイラついてるのに唐突に延々と幸せな愚痴聞かされて正直ウゼーなんて思ってますよ？　お客さんだし聞いてあげようと思ったけどそろそろ我慢ならねーとか私に春がいつまで経ってもこないのにあんたの頭は春でいいなあどチクシヨウとか思ってますんよ？」

にこやかにこんなことを言い放った。

可牧は肌で感じとった。

逃げなければ殺られる。

「おい、ホタルイカー!!」

「都村君!？」

やった、逃げる口実ができた——じゃなくて、お、追いかけてきてくれたの!？ と、受け付け嬢さんの異様な迫力によって思わず優先順位が混乱したが、ともかく逃げなければならぬ。

「す、すいません。私行きます! そ、その……愚痴を聞いてくれてありがとうございます! 色々頑張ってください!!」

ぺこりっ! と勢いよく頭を下げてから再びダッシュ! 都村とは反対の方向へ!

そんな可牧に向かって、鬼っぽい角を生やしていた受け付け嬢さん、

「はいはい、あんたも頑張るなさいよ。若いんだから」

意外といいこと言っていた。

——それを後ろに聞きながらも必死に脚を動かす可牧。さっきまでの怖いおねーさんは頭から去り、代わりに都村のことではいっぴいになる。

「おい！ 待てっつってんだろが、そのイカ！！」

「ま、待たないよ！！」

だって怖いもん！ 可牧は心の中で叫んだ。そう、恐怖だった。やっと恋が実ったと思った。好きな人と歩いて、好きな人と食事して、好きな人とデートに来て――そう、嬉しいことばかりだったのに。

それが全て、幻だったなんて。

夢から覚めた後に残った現実はどうなるのか………それを知るのが怖かった。

だから走る。逃げる。都村を避ける。それで問題が解決するのかと聞かれれば間違いなく否定せざるを得ないのだが、混乱している可牧にはこの選択肢しかなかったのだ。

しかし都村にとってそんなことは関係ない。ただ言いたいことを言うために、男性顔負けの速度で走り続ける可牧を追う。

「つこの、なんつー脚してやがる………てめえはダチョウか！！」

「ど、どうせダチョウだよ！！ 美味しくないよ！」

「バカタレ！！ 北京ダックとか美味いだろうが！！」

「それはアヒル！！」

「似たようなもんだ!!」

勢いに任せて叫びながらも人通りの多い遊園地内を爆走する二人。お客さんたちも先ほどのミサたちのように呆気にとられている。

「うう、なんでこんなにしつこいの! こうなったら……皆さん助けて! この人は痴漢です!! 私は襲われてます!!」

混乱極まったか、好きな人に向かってとんでもないことを言い出した可牧に都村はぎよつとなる。

「なに、痴漢っ!？」

「痴漢に少女が襲われている!？」

「見物せねば!!」

「いや助けるよ!!」

都村は周囲の反応にヤベェと身をすくめるが、すぐに持ち前の勝気で怒鳴り返す!

「っざけんな!! てめえのほうから誘ってきたんだから痴漢っつーならてめえだろうが!!」

遊園地に響き渡ったその通る声を聞いた周囲の人は、

「聞いたか、少女の痴漢が男を襲ったそうだ!!」

「なにっ!？ 見物せねば」

「あんたはなんでもいいのか!？」

なんだか可牧たちと違う意味で突っ走っているのだった。

しかし当人たちはそんな事態に気づかず、まだまだ続ける。

「も、元はと言えばこのデートを計画したのはミサちゃんだもん!
! 私じゃないもん!!」

「じゃーミサが痴漢じゃねえか!!」

「うん!! そうだよミサちゃんが痴漢だよ!!」

そしてこんな結論が出てしまった。

「ミサという子が究極の痴漢らしいぞ!!」

「痴漢の奥義を極めているらしい」

「ぜひ伝授してもらわねば!」

「とりあえずおまえが捕まれよ!!」

いきり立つ変なお客たちは大声でこんなことを言いながら徘徊し
始め、当のミサはわけもわからずに逃げまどうことになるのだが――
それはまた別の話。

「おいっ、ついっ、たっ、と!!」

「うあああ!!」

迷惑と混乱と変な興奮を撒き散らしていた二人だが、ようやく都村が可牧に追いついたところで鬼ごっこを終えた。やはり男の体力には敵わなかったらしく、見事に首根っこの襟を掴まれていた。

「は、離して!!」

「うっせ、逃げんな。いいから話を聞きやがれ」

「いーやー!!」

往生際が悪くじたばたと暴れる可牧。しかしさすがに大声で叫びながら爆走した後で大した力が出るはずもなく、本物の猫にも劣るような抵抗だった。

「あんな、少し落ち着けよ」

「はーなーしーぜー」

「はなしぜってなんだ」

ゼーゼーという疲れたときの荒い息である。それに気づいた都村は彼女が力尽きるまで待とうかと一瞬思ったが……面倒になってやめた。

「来い」

「あうう……」

唸りながらも申し訳程度に手足を動かす可牧。そんな彼女を首根っこ掴んだまま引きずって……

「学生二人、乗ります」

そう言いながら問答無用で可牧を放り投げたのは、誰もが知っている観覧車。

「ここなら逃げられねえだろ」

セリフが悪役っぽい上に受け付けの男の人に生暖かい視線を浴びたりしていたのだが、心が図太い都村はまったく気にしていなかった。

「うう……」

可牧はついに観念したのか、すこしボロい観覧車の座席にちよんと腰掛けた。ざらざら感をお尻に感じながら、所在なさげに観覧車内を見渡す。はがれかけの赤いペンキ、くすんだ銀メッキの手すり……窓の外の景色は徐々に下へと向かっていき、少し赤みが差した空が近くなってくる。

それをゆっくりと眺めていると、少しずつ可牧の心が落ちついてきた。

それを感じ取っているのか、都村も口を開かない。

しばらくの沈黙が続き……やがて観覧車が天辺にきたあたりで、可牧が口を開いた。

「都村君は……どうして、私を追いかけてきたの？」

夕暮れの魔法か、先ほどの狼狽が嘘のように、その声は落ちていた。

ようやくともに話せることにホッとしながら、都村が返答する。

「おまえさ、俺に告白したんだろ？　なら返事くらいさせろってんだ」

可牧の身体が震える。

しかし逃げ道はどこにもなく……覚悟を決めて、都村の瞳を見据えた。

オレンジの明かり——幻想的な色を帯びた都村の顔は、可牧の“好きな人”という鼻眉目を覗いても格好よく見えた。

「俺はよ、あんパンが好きなんだ」

「やっぱり彼女がいいのね!？」

「いや、彼女かどうかわかんねーし」

「男がいいの!？　この男色!！」

「待てや」

続きがあるんだ、と早合点する可牧をなだめる都村。

「俺はあんパンが好きだ。なんで好きかってーとな、味を知ってるからだよ」

何を言いたいのかわからず、きょとんと都村を見つめる可牧。

「俺は、おまえの味を知らねー。だって食ったことねえし。食うもんでもねえしな」

「どうぞ召し上がれ!!」

「そういうことじゃなくてだな!!」

慌てる都村の顔が赤いのは、夕日のせいかな、それとも？

「あー……例えが悪いかな？　ともかく！　俺はまだ、おまえが好きだって断言することはできねえ。今はまだ、わかんねえんだよ。こういうの慣れてねえし。でもな、今日は楽しかったし、その、なんだ。試食コーナーで味見したらしつくりきた、みたいな感じだな」

「えっと、最後まで食べてもいいよ？」

「女が気安くそういうことを言うな!!」

都村の顔はここにきて夕日よりも明らかに紅潮していた。

「とにかく！　とにかく要約するとだな!!」

「召し上がれ」

「違う!!　ああもう——」

頭をがりと掻き毟った都村は、もうヤケになってハッキリと言いつけた。

「俺と付き合え!! 文句あつか!？」

可牧はポカンと口を開けていた。

告白された。都村君の、ほうから? その事実に関頭がスパークする。

スパークしたが――

「んだよ。嫌なのか」

その言葉を、全力で首を横に振って否定して、

「そんなわけなんです!! お願いします!!」

半分泣きながら、懇願していた。

最初から噛み合わなかった二人。おそらく今後もすれ違いは多いだろう。

しかし二人はようやく一つの想いを同じくした。ようやく恋人同士になったのだ。

「――あ、もう終わりなんだ」

「意外と早いもんだな、観覧車ってえのも」

「なんか、寂しいな……」

「そう言うな。また付き合ってやるよ」

「うん……うん!?　ね、ねえ都村君。もしかしてさっきの“付き合う”って、またそういう意味だったりしないよね!?’」

「あん?　あったりめえだろ」

「ええええええ!?’」

「なんてな」

恋人同士になったものの――

この二人は、果たして?

そして――

痴漢騒動、どうなった?

第五話 デートで初めてわかること 後編（後書き）

ここでもうやくカップル成立でーっす！

前回がわりとのんびりだったんで、今回はちゃんと突っ走らせました（言葉通り）

なんのせよかったよかった。ここでもう終わっても違和感ないんじゃないだろうか。そんなことを思いつつ、まだ続きます。

次の更新も相変わらずなんで、まーお待ちを笑

おまけ、そのいち それゆけ痴漢（前書き）

今回のお話はおまけです。タイトルからもわかるとおり、痴漢だの変態だのな要素が含まれていますのでそういうのが嫌いな人は読まないでください。読まなくても本編には支障ありませんし、もうすぐ更新します故に。

おまけ、そのいち それゆけ痴漢

とある遊園地。

あるときはファミリーに、あるときは恋人達にこよなく愛されている、穏やかなはずの楽園は今——騒然となっていた。

曰く、伝説の痴漢は何処に、と。

家族連れのお父さんも、彼女連れだったはずの色男も、そして遊園地の職員までもが——自分は男だ、ならば行かねばならぬ！　そう心に決め、その伝説を探していた。

そして、その伝説の痴漢——という設定を勝手に植えつけられたミサは、お供の遠衣と一緒に隠れていた。隠れ場所はメリーゴーランドの受け付け場の影。ちょうど植木と建物と壁になり見えにくい隙間ができているのだ。

「うう……あたしの名前が聞こえたと思ったらいきなり痴漢呼ばわり！？」
咄嗟にここに隠れたものの……どうしようかしら」

「はふーん……ミサ嬢と密着して、かほりが——ぐふっ!!」

「痴漢っていったら誰がどう見てもこいつでしょうに……」

遠衣のみぞおちに体重の乗った肘打ちを入れながらも、ミサは悩んでいた。どうする、なぜこんなことになったのかさっぱりわからない以上、下手に表へ出るのは危険だ。自分の顔が割れているかもしれない……っていうか、なんで痴漢？　至極もつともな疑問を

持ちながらも、とにかくここを突破することを考えなければならぬ。

「くっそー、このメリーゴーランドの馬が本物だったら、今すぐ」

「馬刺しにして食ってやるのに」

「そうそう、お腹空いた――あんたを刺して食べてもいいのよ?」

「食べられるなら別の意味がいいなあ」

この期に及んでへらへらしている遠衣にミサは少しムカついたが、考えてみればこの危機と彼は全く関係ないのだ。一緒にいてくれるだけでも感謝すべきなのだろう。多分。

「いやー、しかしミサ嬢が痴漢だったとは初めて知ったよ」

しかしこの一言で彼に対する感謝という念が一切無くなったのは言うまでもない。

「ねね、僕にも教えてよー、その痴漢テクニック」

「……ええ、教えてあげるわ。まず舌を出しなさい」

「うひょー」

アホみたいに喜んで舌を出す遠衣。そして無意味にれろれろ動きます。まるで変態だ。むしろド変態だ。

「それからあたしのアップパーカットをその顎にくらいなさい」

「べ……あの、それ、舌が千切れるんじゃない」

顔を青ざめさせ、速攻で舌を引っ込めた遠衣の言葉への返答は、

「ええ、血を觀賞するテクニクと書いて血觀テクニクでしょ？」

意外にもダジャレだった。

「あたし、そういうテクニク、自信あるわよ？」

そして怖いダジャレだった。

口にするのは冗談でも、彼女の目は全く笑っていない。痴漢として追いかけるというかつてない恥辱に塗れて過激になっているのだ。そんな身の危険を敏感に感じ取った遠衣は、これ以上ふざけるべきじゃないと判断し、きちんと謝ることに決めた。

「ごめんくさい」

謝り方を誤った。結局彼は激しいアッパーカットをもらうことになるのだった……なんとか舌は千切れずに済んだようだが。

「どうしようかしら、可牧達は気になるけど、ひとまずあたしたちは逃げないと……でもどうする。あたしはろくに動けないし、使える道具なんて」

ふと、ミサは気づく。

なんだ、あるじゃないか、と。

アップーの衝撃から復活した遠衣は、目の前の見知った女性の邪悪な笑みを見て——ああ、やっぱふざけすぎたかなー、なんて。ようやくちょっと反省したのだった。

もう、遅いが。

——伝説の痴漢が、ついに姿を現した。

その噂はたちどころに広まり、誰もがその場所を目指して走った。男も女も関係なく——いや、女性の方々はアホな男につき合わされているだけだが、それはともかく。

遊園地の中心、最も大きな広場に、その痴漢はいた。

「我こそは伝説の痴漢、ミサなり!!」

そう高らかに宣言していたのはミサ——などではもちろんなく。

遠衣だった。

しかも格好が変だった。

まず、ズボンを頭にかぶっている。もちろんきちんとかぶると何も見えないので、股間のチャックをあけ、そこから男らしい瞳が覗いている。変態だ。

上半身は裸だった。これは標準的な男の身体だ。ここで曝すのは

変態だが。

そして下。はいているはずのズボンが頭にあるということはもちろんパンツ一丁で、しかし申し訳程度に上着を膝のあたりまで着ているのは果たして意味があるのだろうか。とりあえず変態だ。

さらにパンツには『日本一』と書かれている。極めて普通な文章だが遠衣が履いているからもう変態な文字にしか見えない。

そう——誰がどう見てもわかりやすい変態がそこにいた。

「ちなみに“ミサ”とは『見てくれ僕を!』と『さあカモン!』の頭文字が合体したあだ名だ! さあどうだ! まいったか!」

何がまいるのかさっぱりわからないが、ここまでずっとぼけた格好をされたあげくに「まいったか」と言われれば、そこにいた人間の大半が「まいった」と言わざるを得なかった。人間って不思議。

「さあ貴様ら! この僕を探していたのだろう? 質問があれば受け付けるぞ、この伝説の痴漢がな!」

「あ、あの!」

命知らずなんだかイベント好きなんだかは知らないが、一人の男が拳手をした。

「その格好はなんですか!」

ストリートかつ誰もが思っていた疑問だ。

それに遠衣は完結に答えた。

「パンチラだ!!」

チラどころかモロなのだが、なんとか膝にかかっている上着で微妙にそれを隠し、パンチラにしているのだと――その場にいる人たちは理解した。

なんで理解できるのかは世界の摩訶不思議である。

「えっと、ミサさんはどういう痴漢なんですか!？」

とてつもない質問がでた。

「要約すると、とてつもない変態だ!!」

とてつもない答えだった。

さて――ここからは質問タイムだ。我先よと彼に疑問を投げかけていく観客達。

「おまえはこれから何をしようとしているんだ!？」

「知れたことを――痴漢であり、変態である僕がするべきことは一つ! 変体だ!」

「何かに変身するのか!？」

「そうさ! 僕の舌は観覧車となってグルグル! 右手の指はメリーゴーランド、左の指はコーヒークップへと変化して、さらにグ

ルングルン回ってあなたのイヤんな場所を直撃さ！　そして僕の股間はジェットコースターでどっかーん！」

「こ、こいつあなんて嫌な遊園地だ！！」

「親御さんは泣いてるぞ！」

「実は僕も泣きそうです！！　ちくしょー！」

「なんだと、それでも変態か！？」

「ああ、変態だ！　僕は変態だ……何もできないちっぽけな存在、でもちゃんと生きてるんだ、変態なんだ。この素晴らしい世界に変態として生まれ、僕は感謝しているんだ。僕を変態に生んでくれて大変ありがとう、お母さん！！」

「あんた本物の変態だよ！！」

「ありがとう！！　僕、頑張って変態として生きるよ！！」

感動的なセリフだった。変態という単語さえなければ。

そんな、異様に盛り上がる人々から離れた地点。

皿を置いてそそくさと遊園地を後にしながら電話をかける本物のミサ。

「――あ、もしもし警察ですか？　はい、なんだか変態集団が変態宗教の変態集会してるので何とかしてください。は？　素晴らしい？　あなたも変態ですか。まあそれはいいです、とりあえず職務を

全うしてしょっ引いてください——あなたも参加して騒ぐとか無しですよ？　では」

きっちりと後始末もするあたしって、なんて完璧なんだろう……ミサはそう自己満足すると、どこぞの変態のことは忘れて清々しく帰っていくのだった。

そして間もなく。

警察がやってきて大事になったのだが……とある警官が遠衣と顔見知りだったこともあり、その場にいた変態たちはすぐに解放された。

そして彼は——警官とも意思疎通できる変態として、かの変態界に衝撃を残し、ゆくゆくは本当に伝説の変態と呼ばれることになるのだった……

本当、変な話である。

おまけ、そのいち それゆけ痴漢（後書き）

本編書いてるうちになんとなく思いついて書いてみた。
反省はしていない。

けど自分にはあまり変態変態連呼するような話は合わないと思っ
た……

合わない、ですね？ 多分^^；

第六話 すれ違い、再び

数々のすれ違いや妙な騒ぎがあった日曜日。それを超えた今、可牧と都村は本当のカップルとなったのだ。

それを思い出し、ミサは深くため息をついた。

机に突っ伏しつつ窓から外を見る。天気は雨が降りそうなほどの暗澹とした曇り。この天候というやつは人の感情を読んでいるのではないかと時々思う。なぜにこうも気分と同じ色をしているのか。なんかも力つく。そんな脈絡のないことを考えながら、ミサはもう一度ため息をついた。

見上げていた視線を下へ向ける。少しずつ増えていく登校中の生徒。教室にも幾人かの生徒が入ってくる――今日のミサはなんとなく誰よりも早く教室へ入ったのだった。それというのも話は戻るが可牧のことである。

ミサと可牧は親友だ。そんな彼女が可牧のカップル成立を祝わないはずはないし、なにより。日曜日のことで都村の誠実さも見ることでできて何も心配はないはずだった。

そう、何も心配する必要がないのだ。

だからこそ……

「つまんなあい」

こんな勝手な感想が出てくるのだった。

このミサという少女。今までの行動からして強気、友達思い、ツコミ、ドS等、様々な性格が見え隠れしていたが……究極的には気分屋だったりする。おもしろいことであれ、おもしろくないことであれ、何かしら自分に感情の揺らぎが無いと満足できないのだ。

だから。可牧が顔を真っ赤にしながら泣きそうな表情で教室に入ってきたのを見た瞬間、ミサは一気に元気になった。瞳が輝いた。血行も良くなり肌もツヤツヤ——ああ、イベントとは美容にも最適だ。

「どうしたの、可牧。そんな顔して」

そんな喜びを押し隠しつつ、冷静にいつもの様子で語りかけるミサ。

可牧はその問いに答えることなく、ミサの前の席に勝手に座って、叫んだ！

「あるだけ酒もってこーい！！」

「ここ居酒屋違うから」

なんだこれは。まるでフラれた女みたいじゃないか。ミサの目ますます輝く。

「じゃあエタノール持ってこーい！」

「いまのあんたに近づけたら引火して爆発しそうね」

「もうしてるよ！ ドカーン！！」

椅子に座った状態から器用に手足を目一杯伸ばして大ジャンプ。小さな花火に見えなくもない。

「それで、何があったの？ そんなに爆発して」

「ミサちゃん！？ 人が爆発する理由って言ったら一つしかないでしょ！」

「多分いっぱいあると思うわよ。戦争してる国にでも行けば特に」

「そう、戦争だよ！ わかってるじゃん」

さっぱりわからない。

「もうね、爆弾とか原爆とかね、もうね、どカーンって食べるとね、どカーンってなってね、どカーン！！」

とても意味不明などカーンを連発する可牧。そろそろ読解不可能なレベルになってきたので、ミサはその熱を冷ますことにした。

バッグをごそごそ、それを取り出す。そして。

ちよろちよろちよろ……と水筒のお茶を容赦なく可牧の頭にかける。

「頭、少しは冷えた？」

「なんか……水分を吸収して髪が伸びそう」

「あんたの頭は鉢植えか」

そんなことで髪が生えれば世の中年たちは苦勞しないのである。

「それで、何があったの。人間にも理解できる言葉で説明してね」

「何言ってるの？ 私は人間語しか喋れないよ」

嘘つけ、とそこにいる誰もが思った。

「はいはい、それで？」

「うん！ あのね、都村君とケンカしたの！！」

やっぱりか……その場にいた誰もが思った。

「だから別れた」

待てやオイ。その場にいた誰もが思った。

そのときの状況を聞くと、こういうことらしい。

今朝、可牧と都村は仲睦まじく登校していた。彼氏、彼女と改めて認識した初めての登校だ。二人とも照れつつ、楽しく登校していた。

「はい都村君、あんパン」

そして若干残っているパシリ習慣のため、可牧は都村用のパンをきちんと常備していた。

「お、さんきゅ」

いつものように受け取る都村。

しかし可牧はいつもの可牧ではなかった。きちんと結ばれた……そう確信した可牧なのだ。だからちよっとお茶目してみた。

あんパンと言って渡したのは、

「むぐっ!? こ、これカレーパンじゃねえか!!」

「あはは、ひっかかったー」

あんパンの形をしたカレーパン。朝早くからやっていて学生もよく利用する常連のパン屋さんが作ってみたいらしい。彼氏にイタズラするのも彼女っぽいよねー、てへ。そんなことを考えた可牧がそれを買って実行に移したのは見ての通りだ。

「てめえ……」

しかし、これが予想外に都村の反感を買ったらしい。

「はい、本物のあんパン」

「待てや、コラ」

都村の形相はいつかようになっていた。

初めて可牧が告白したとき、あんパンを落としたときと同じ顔に。

「あんパンを食べようとした俺の気持ちはどこにいくんだ！」

「え、今あんパンを食べればいいでしょ」

「違う！ さっきあんパンを食べようとしてカレーパンを食べてしまったという気持ちをどうすればいいのかと言っているんだ！」

「じゃ、じゃあ逆にカレーパンを食べようとしてあんパンを食べればいいでしょ！」

「俺はあんパンが食べたいんだ！！」

「食べればいいじゃん！」

「そんな簡単な話じゃない！ 俺はあんパンを食べようとしたのにカレーパンを食べてしまったという事実を覆しつつあんパンを食べたいんだ」

「じゃ、じゃあカレーパンを食べると見せかけて食べずにあんパンを食べれば逆のことしつつあんパンだけを食べられるんじゃないかな！？」

「逆のことをしても意味ねえんだ！ あんパンをプラスとすると、カレーパンがマイナスになるならよかった。だがちよいプラスなんだ。するとどうだ、プラスちよいプラスの気持ちが合わさってかなりでっかいプラスになるだろう！？ このプラスをどうすればいい

のかと聞いているんだ!？」

「そんなの適当にプラプラさせておけばいいじゃないの! このあんパンは私の手作りなんだよ!？」 いっぱい勉強して作ったんだから、食べてよ!!」

「そんなプラスかマイナスかわからんもん食えるか!!」

「なによなによ! 私頑張ったのに……もう私たち、終わりよ!!」

回想、終わり。

話を聞き終わったミサは……そしてなんとなく盗み聞きしていたクラスメイトは、そろって脂汗を滲ませながら首をかしげていた。外を見ればいつの間にか雨が降っている。きっと可牧の話を聞いた天候さんの脂汗の代わりだろう。

「ね、ひどいでしょ!! わかってくれる!？」

「……ごめん、あたし国語は得意なはずなんだけど、さっぱりわからない」

「プラスとマイナスだよ? 数学の話だよ!!」

おそらくそれも違う。

「私、頑張ったのに」

「ええと、確かに頑張ったわ」

頑張ったのは、わかる。とりあえずそれだけは。

「ここまでできる彼女ってなかなかいないよね？」

「ええ、彼氏のためにあんパン焼く子はそうそういないわ」

それも間違いない。

「あ、でもパン屋の娘さんとかどうなのかな。やっぱり頑張ってるあんパン焼くのかな！」

「それはないかと」

「うん、きっと焼くよね！」

「聞いてねー」

「そうだ、きっと私と一緒に悩みを持ってるはず！」

カツ！！ と稲光と共に断言する可牧。天候さん、空気読みすぎ。

「全国のパン屋の娘さん探してもそれはなかなかいないと思うわ」

「私、パン屋の娘さんに弟子入りしてくる！」

雷がどこかに落ちた。その轟音と共に走りだした可牧は――

「だからたまには人の話を……おい」

ミサの静止も聞かず、教室を飛び出してしまった。

まったくもって何が何やらわからない。

しかし……

「これは大変だわ、なんとかしなくちゃ！」

ニヤリと口元を歪ませるミサを、飽きずに光る稲妻が照らしていた。

誰もが思った。こあい。

その頃、都村の方では。

「あ、おい！」

「んー？　僕ちんを呼ぶのは誰だー？」

雨に降られながらもようやく学校の玄関にたどり着き、タオルでわしゃわしゃと頭を拭いていた遠衣はゆるゆると振り返った。

「俺だ」

「男にゃ興味ないの。じゃ」

都村を一瞥すると、身も蓋もなく無視しようとする遠衣。だがし

かし、

「なあ近衣」

「僕は遠衣だ!!」

妙ちくりんな間違いに、思わず反応せずにはいらなかった。

「む？ そうだったか。でも遠いより近いほうがいいぞ、きっと」

「はいそうですかと答えたら僕はどうすればいいんでございましょうか？」

「近くなればいいじゃねえか」

「なにが!？」

「んなもん自分で考えろ」

遠衣は頭を抱えた。基本マイペースで時にはミサすら手玉にとる自分がツツコミを……よもやこいつ、僕の天敵？ そう認識すれば話は早い。とっとと用件を済ませて消え去ってもらおう。そう判断した遠衣はへらへらと友好的なつもりの笑顔を見せた。

「で、僕に何の用？」

「ああ、実はな」

都村は遠衣に今朝のことを説明した。内容は可牧がミサに話したのとはぼ変わらない。

……やがて話し終わると。遠衣も先ほどのミサたちと同じような顔をしていた。

「どう思う？」

「日本語喋れって思う」

「何を言ってる。俺は日本語しかできんぞ、英語は書けるが言えん」
そんなことは誰も聞いていないが、可牧とミサと似たようなやりとりをする二人。案外似たもの同士なのかもしれない。

「それで、どうやって謝ればいいと思う？ いや、そもそも俺はなんであんなに怒っていたんだろうか……自分でもわからない」

そのときの言語が誰にも理解できないのだ。それも仕方ないだろう。

遠衣は頭を働かせた。いつも働かない脳細胞が動き出す。

そしてその脳細胞が言った。

「働いたら負けかなと思っている」

脳細胞は部屋に戻った。パソコンの前で延々とクリックをし始める。まったくダメな脳細胞だ。僕も混ぜろ――

「おい」

妙な思考に飛びそうになった遠衣の意識が戻る。なんだこいつ、まだいたのか。

「俺はどうすれば」

「はいはい、うちのボスに相談してみるからちょっと待ってなさいな」

遠衣は愛しのミサの顔を思い浮かべる。きっと喜んでくれるだろう。そう考えるとこの宇宙人語のような話に付き合うのも悪くないか……そう思ったとき。

何かくる。

すごい速さで、なにかが。

それは廊下の向こうから玄関に向かって一直線に――

「ししよおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

ソレはどうやったのか、微塵も減速せずに下駄箱から靴を取り出して履き、そのまま外に向かって爆走していった。

まだ見ぬ師匠がいる、パン屋に向かって……

「なんだアレ、青春か」

先ほど別れた自分の彼女が雨の中を走っていく様子を見てそんな感想を漏らす都村を見て、遠衣は“やっぱこいつ宇宙人なんじゃねーの?” などと思っていた。

第六話 すれ違い、再び（後書き）

おまけを挟み、新しい話をお届けします。

いやー、本当フリーダムなペースで書かせてもらってます笑

次の話もいつ書くかはわかりませんが……また気長にお待ちいただけたら嬉しいです^^

第七話 お互い暴走開始

可牧の暴走から数分後。

玄関で呆然としていた都村と遠衣の二人と合流したミサは、教室で交わしたやりとりの一部始終を語って聞かせた。

「なんてやつだ……パンのためにそこまでするか、普通!？」

おまえが言うなおまえが言うなーっていうかおまえのためだー!
! と心の中で激しくツツコむミサと遠衣。しかし口にはしない。
とてつもなく口にしたいが、しない。なぜなら、

「待てよ? パンのためにそこまでできるってことは、やっぱり俺たちって気が合うんじゃないか!」

そう、なぜなら――都村が意味不明な思考回路と理屈によっていい感じに自己完結しようとしていたからだ。結局は可牧の印象が良くなるならば、それをわざわざ邪魔することもないだろう。

「いや……でも今更だよな。俺たちケンカしちまったし」

「あんたは仲直りしたいと思ってるんでしょ?」

率直なミサの言葉に「うっ」と詰まる都村。やはりこの男、根は純情なのだ。不器用とも言える。

「……ああ。でもな、どうしたらいいかわかんねんだよ! とりあえず教えてくれ、おまえらから見てこの場合、俺とあいつのどっ

「ちが悪いんだ!？」

「どっちの頭も悪いわ」

「間違いない」

即答なミサ、即同意な遠衣。二人のリズムの相性は今日も抜群だ。ミサが聞いたら怒るだろうが。

「あーっと……じゃあ俺は謝らなくていいのか？」

「なんでそうなる」

やっぱり頭が悪い。ミサは改めて結論づけた。

「どっちが悪くても、こういうときは男が謝るのよ。そう法律で決まってるの」

「えっと、男として僕も反論したいところなのですが、ミサ嬢？ この法律ですかそれ」

「ミサ教」

「法律どこいったん？」

いつの間に宗教の話になったのか。

「んだと、俺なんかあんパン教だ!！」

「なんで張り合うん？」

この話の飛び方。明らかに可牧と似ている。それが気が合うということなのか、単に頭が悪い同士なのかは不明だが……仮にも応援していた（つもり）ミサとしては仲直りしてほしかった。それは紛れも無い本心なのだ。

「ともかく！ あんたが謝るっていうのは間違いなく最良の解決法のよ」

そう。

「だから謝り方の練習をしましょう。いろいろ」

とても面白い仲直りをしてほしいと、ミサは本心から思っていた。

そして単純かつ頭が悪いらしい都村はあっさり頷いてしまい、なんとなくミサの本心を察した遠衣も「面白くなるならいいか」と協力することになるのだった。もちろん変な意味で。

そして、学校にて変な謝り方講座が始まったその頃。走り去った可牧が何をしていたかというところ……とりあえず高校から最も近いパン屋へと殴り込みをかけていた。

「たのもー！！」

「はいはい、いらっしやいませ」

出てきたのはエプロン姿の柔和なおじさん。登下校の途中に立ち

寄る生徒も多いこのパン屋は、このおじさんが奥さんと二人で経営している。学生に優しいお値段、素朴ながらも手作りのパンは人気があり、実は都村にとっても買い食いの常連店だったりする。

美味しいパンを食べている人の顔を見るのが幸せ、そんなおじさんを前に可牧は注文した。

「娘さんは!？」

「……はい？」

もちろんおじさんの目は点になった。

「だから、娘さんはいませんか!？」

「え、ええと」

おじさんは知らないだろうが、可牧がパン屋に殴り込みした目的——それは、自分と同じ悩みを持っている（と勝手に決めた）パン屋の娘に弟子入りすることなのだ。本当に知ったこっちゃない。というか知り得るはずも察せるはずもない。

「うちは子宝に恵まれなくてねえ。跡継ぎもいなくて困ってるくらいだから……娘はいないんだけど」

「この店はダメだ」

温かい店を一刀両断。おじさん絶句。

「失礼しました」

本当に失礼なことを言って、暴走状態の可牧は店を後にした。

そのころ、都村は……ミサの指導の下、可牧に謝る練習をしていた。

「いい？ あんたにはまず可牧への気持ちを思い出してもらおうわ」

「可牧への、気持ち……」

場所は近所の公園。興味本位でついてきた遠衣も加え、三人でコソコソと隅っこに寄っている。ミサの顔は真剣、都村も真剣。遠衣はぼけーっとしているが、周囲の見張り役をしていた。警官でも通ったら困る。先日の遊園地騒動が尾を引いているわけではなく、単に授業中であろう時間に制服姿を見られるのはヤバイからだ。

それを言えば、可牧も制服で堂々とパン屋へ爆走している。警官に見つかって捕まってくれば世話ないのだが、それはありえないとミサは確信していた。長い付き合いだからわかっている。可牧が面白いことをするとき、それが運良く——いや、運悪く途中で止まることは、ほとんどないのだ。むしろ運命すらも可牧を見て楽しんでいるかのように助長していく気すらする。

だからミサは、可牧が大好きだった。

「可牧、好きだあああああ!!」

「なんでミサ嬢が告ってんの」

「今のが見本よ。実際に告白したのは可牧でしょ。それを今度は都村君から告って、気持ちを確かめあうのよ！」

思わず叫んでしまったただだが、ミサはサラリと流して適当に繋げた。遠衣はニヤニヤしていたが、都村は生真面目そうに頷いてあっさりと騙されていた。やはり頭がよくない。

「さあ、今度は都村がやってみなさい！」

「よ、よし！」

都村は気合を入れてあんパンをかじった。

……あんパン？　一瞬なにを見たか理解できなかったミサと遠衣は首をかしげた。

「待て待て待て。都村、おまえなんであんパン食べてんの」

「あ？　気合入れたただだが」

「なんで気合入れるのにいちいちあんパン食べるのよ！！」

「んだよ、緊張するときは唾を飲み込むだろうが。あれと同じで、俺はあんパンを飲み込むんだ」

なんとなく誰もツッコむ気をなくした。

「さて、気を取り直して。あんた、告白してみなさい」

「お、おお」

ジト目になったミサにビビりつつ、都村は頷いた。

「可牧役は遠衣よ。さあ演技開始」

ニヤ目になったミサにビビりつつ、遠衣は頷いた。

「って頷けるかぁ！？　なんで僕まで！！」

「そのほうが面白いからよ」

「僕は面白くないもん！」

「あんたが面白いかは聞いてない。あたしが面白いかだけが重要。OK？」

遠衣はなおも「いゃん！　やんやんやん」と気持ち悪く首を横に振っていたが、やがてミサの眼光に観念したのか嫌々ながらも頷くことになるのだった。

「あれ……面白いからやってるだけなのか、これ」

ようやく気づき始めた頭の悪いあんパン男児。しかしまだ心から確信していない小さな声では暴君ミサを止めることなどできない。

「ああ、これが黒ミサというやつか。神を冒瀆したり、見てはいけなかったりするんだよな。あれ、なんだか妖怪とか悪魔っぽいぞ。なんてミサ嬢にぴったりなんだろう」

ミサ違いながらも上手い例えを述べる遠衣の顔にぴったりと足型がついた。言うまでもなくミサが踏んだからだ。

「さあ、始めなさい」

ミサの号令。真剣味を帯びる都村の顔。

そして遠衣は――

「あっはあん、うっふうん。わたしったら可牧よおん」

壊れた。どうやらミサは変なスイッチを踏んでしまったらしい。

「どうしたの遠衣。すごく汚いわよ、顔とか声とか」

都村もすごい勢いで頷いている。

「んふふ、んふふふ。どうしたのお、都村っくうん♪ 遠慮なく告白してくれて、いいのよおん？」

ミサはなんとなく上空を見上げた。単に汚らしいモノから目を背けたただけだが……なにやら雲行きが怪しいことに気づく。心なしか雷も見える気がする。遠衣がこの世全てを冒瀡するような真似をしているから天が怒っているのだ――ミサは本気でそう思った。

「可牧、俺と付き合ってくれ！」

しかし律儀に告白の練習をする都村。こんなモノを前によくやるなあ、勇者だなあ、なんてしみじみ思うミサの心はきつと天だけがわかってくれる。

「突き合って？ 私と突き合うの？ 何を？ ふほほ！ やーらし」

そしてコイツの心は誰にもわからない。天すらも。

「ぶほほほ！ あんた男でしょ？ 男なら突いてやるくらい言えー」

鈍い音がした。ミサは上に向けていた視線を戻す。

都村が突いていた。偽可牧のみぞおちに。そう、正拳突きだ。

「あまりにも汚くて……つい」

「気持ちわかるわ」

よくやった。ミサと世界がそう思ったところで、急所を突かれた不届きモノは崩れ落ちた。

所変わって、可牧のほうは再びパン屋を訪れていた。

「いらっしやい」

静かな店内に渋い声がよく通る。このお店は『一子相伝』という、およそパン屋には似つかわしくない名前だ。しかしその名の通り、昭和初期に開店してからずっと一人だけにパンを作る技を伝えてきた老舗だ。たかがパン、されどパン。伝統の味というものはある。それを現在受け継いでいるのがこのお爺さんだ。

「娘さんはいますか!？」

そんな由緒あるパン屋において、不屈きな注文をする女がここに一人。

「娘? いいや、うちには一人息子がおっての……」

お爺さんは懐かしむように目を細めた。

「昔からうちのパン屋を継げとうるさく言いすぎたせいかな、反発しての。単身で上京なんぞしおった……しかし息子は勉強のできる子じゃった。有名な大学へ進み、大手の会社に就職」

お年寄り特有の長いお話が始まった。

「そして破産した」

忘れっぽいお年寄りの話は結構、途切れる。

「結局うちに帰ってきての、今は必死にパンの勉強をしとるわ。ほっほっほ」

なんとなくいい話だった。

「娘じゃないならどうでもいいです」

そして可牧は身も蓋もなかった。

そのころそのころ、都村の告白練習はというと。

「可牧、結婚しよう！」

話が飛んでいた。

「五百万出さない！ うっふんあっはん！」

遠衣も酷いことになっていた。

そのころそのころそのころ、可牧のパン屋訪問は。

「娘さんいますか！」

「今年で二歳になりますが」

「未熟者が！！」

それにしてもパン屋の多い街である。

そのころそのころそのころそのころ、都村と遠衣の漫才は。

「子供の名前は何にしよう。あ、そうだ！ あんパン！ ダメだ、可愛いがりすぎちまうぜ！」

「うふふ、きつと食べたいくらいに可愛い子が生まれるわよ！
うっふんあっはん！」

「ていうか本当に食べそうね」

悪ノリはどんどん進んでいく。

——そして。可牧はご町内で最後のパン屋にたどり着いた。

「娘さんはいますか！！」

「はあ、そこで働いておりますが」

人のよさそうなおじさんに指された方を見ると、そこには可牧より少し年上くらいの女の子が焼きあがったパンを並べていた。

「師匠！！」

可牧は叫んだ。脈絡もなく。

「は、はい？」

女の子が振り向く。素朴な顔立ちに笑顔とエプロンが似合っていて、看板娘というイメージがぴったりだ。そんな見るからに普通な女の子に、明らかに異常な精神状態の可牧が迫る！

「師匠ならわかりますよね！
好きな人にあんパンを食べさせたい
っていう、この気持ちだ！」

滅茶苦茶だ。友人であるミサや遠衣、もともと変な都村はともかく、一般人が突然こんなことを言われて対応できるはずがない。

現に看板娘の少女は、可牧の勢いに押されて身体を震わせ、なぜか掠れた喉から悲鳴のような声をあげました。

「わかる!!」

訂正。悲鳴のように肯定しました。

「ああ、師匠! やっと出会えた! 私に恋のパン作りを教えてください!」

「弟子よ! 道は厳しいぞ!」

「望むところ!」

おそらくこの世界で誰一人として理解できないであろう話で意気投合した可牧と少女。つまるところ、簡潔に言えば……どこからどう見ても一般人に見えた看板少女も中身は変だったというわけである。めでたしめでたし。

——時を同じくして。都村の告白練習も最終段階に入っていた。

「可牧、死ね!!」

要約すると一緒に墓に入ってくれということらしい。

「完璧ね！」

そのセリフを大絶賛するイカれた女性。可牧が悲しんだことに怒っていたはずのミサである。

「本当か!!」

喜びの声。

「本当か？」

疑問の声。

「ええ、絶対に面白いことになるわ」

どうやら楽しすぎて可牧の悲しみが二の次になってきたらしい。

本当にパン屋へ弟子入りしてしまった可牧。

すっかり玩具にされている都村。

果たして、次にこの二人が会うときはどうなってしまうのか。

第七話 お互い暴走開始（後書き）

えー……超ずいぶんと久しぶりになりますが、ようやく更新となりました。楽しみにしてくださっていた方いましたら本当に申し訳ない。

次の話もすぐとは言えませんが、今回ほどの時間はかかりませんので、また気長に待ってくださいたら嬉しいです^^

しかし久々に書くとしたのしーですコイツら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3944e/>

決め手はあんパン

2010年10月10日13時59分発行